

それから間もなく、私は翌日の時間の打合せを済ませ、夫人を歸してからテーブルについたが、残された紙片が氣になつて仕方なかつた。夫人と話してゐるうちは、如何にも草加らしい要求で、急にどうにもなるまいといふ風に思はれたのに、一人きりになるとすぐに變つてきた。何とかしてやりたくないのである。たとへばその日に間に合はせることが出来ないにしろ、いつか買はなければならないのだと思ふとよけいであつた。然し私は街の電気器具屋に電話をかけ、草加の欲しがつてゐるたいいの部分品のあるのをたしかめたけれど、それが非常に高價なのに驚かされた。全部で三百圓もするといふのである。そこで私も仕方がなく、近日中に受取りに行くつもりだから、ほかへ賣らないやうにと頼んで電話を切り、暫くはそのやうに高價なのを知つてゐて、夫人を通じていつてきた草加の意が、どのやうなところにあるのかと考へてもみた。これまでに度度同じ店へ出かけてゐる草加にすれば、初めて買ふにしても全然知らない筈はないし、ただせつばつまつた氣持から、何とかしてくれるだらうと思つたのかも知れない。

それにしても三百圓は少しく高過ぎる。すでに私の父からは無理矢理に二百圓も引出してゐるので、新しい相談に乗つて貰へさうな自信もなく、だからといつて職場の連中を見渡しても、おいそれとだしてくれるやうに思へるものもない。そしてすぐに思ひだされるのは、例の大山みつ子に貸した千圓である。曾て山邊と共に訪ねたときの様子では、期限内に取れるとも思へなかつたけれど、更に事情を訴へたら三百圓ぐらゐなら何とかして貰へさうにも考へられてきた。それが若し駄目だとすれば、それを抵當に山邊から借りてもよいと、場合によつては私が債務者になることで急場がしのげるやうにも思はれる。然し何れにしても、その日の草加を満足させることの出来ないのは明らかであつた。

その夜私が草加の家を訪ねたときには、豫想通り彼は研究室に閉ぢこもつてをり、や

はり中から鍵を用ひてあるといふことであつた。夫人が呼んでもただ返事をするだけで、容易に現れさうには私も慣れてしまつたつもりだが、朝から食事もとらないでゐることを知らされると、いささかやりきれない氣持に襲はれないでもなかつた。そして更に夫人から、今日は徹夜してもしあげてしまふといつてゐるのですが、本當にもうそのやうなところまで行つてゐるのでございませうか、とたづねられたのには簡単に返事することも出来なかつた。漠然とながら想像される機械の組立には、計畫に誤算のない限りさほどの時間を要しない筈である。その點期待が置けなくもなかつたが、それ故に依頼された部分品のひとつをも入手出来なかつたことを、どんなに彼が残念がるであらうかと、すぐに私の目の前にはその不機嫌な顔が浮びあがつてくるのであつた。

話題もなく夫人と向ひ合つて二十分も経つたであらうか。不意に咳拂ひといつしよに隅の襖があげられ、油に汚れたままの作業衣姿の草加が出てきた。それはいつになく元氣で、すつと飲まず喰はずにゐるとも思へない風貌であつた。私と瞳を合せた顔には、

變に人なつこく感じられる微笑まで浮べてゐた。

然し私はま向ふから、

「頼んだものは大丈夫かしら？」とたづねられて狼狽した。

草加もすぐにそれとさつたらしく、火鉢の縁に兩掌をかけてから坐り込んだが、別に機嫌のわるい顔も見せず、かたはらの煙管を手にながら、あそこの親爺は現金だからね、といつた。それで初めて私も彼が突然私に金の工面をしるといつたのではなく、電氣器具屋から品物を借りてくれといふ意味だつたのであらうと思つた。さうなるとまた私には、それが如何にも草加らしくないやうでゐて實は草加らしく思へるのであるが、あの電氣器具屋の挨拶から考へて、過去にどれほどの品物を買つてゐるお客様にしろ、三百圓もの品物を貸してくれるとも思へなかつたので、あらためてそのお人好の點に微笑まされた。

大山みつ子の問題を持ちだし、もう四、五日待つてゐて貰ひたいと述べ、今度は自信

があるからと附加へると、幾らか不安さうな面持に變り、とにかくお願ひしよう、と彼はいつた。

そこで私もあらたまり、

「市葬までにはまだ相當の日數もあるやうですから、それまでに完成させればいいぢやありませんか」といつた。

草加もちらと夫人を見やつて首肯いた。

「もう出来たやうなものなんだよ、長い間世話になつちまつて、お禮の言葉もない、本當に濟まない」

「そんなことはありません」

「けど何だね君……眞理といふやつは簡単なものだよ、それが見つからないうちは齒も立たん感じだが、いちど見つかつたとなつたら何でもない、考へぬいてきたのが馬鹿馬鹿しいくらゐだよ」

さうして高高と笑ひだした彼に、思はず私も誘ひ込まれて笑つたが、妙に私には笑ひきることが出来ないまま、若干皮肉を意識しながら、

「何とか今度は成功させて貰ひたいもんですね」といつた。

「大丈夫……これが駄目だつたらもうやめてしまふ、顔向けが出来なくなるからね」

「いいえ、さういふ意味でなく、私たちの希望としてですよ、ねえ奥さん」と私は夫人をかへりみた。

「さうですとも……」

冗談とも本氣ともつかない態度だつたが、そのときの草加の自信はたいしたものらしく、いつもなら女だてらに何だと嘔鳴るところを、

「まあ、みてるがいい」と苦笑しく笑つただけである。

いつたん歸宅した私が、翌朝食事を濟ませて再び訪ねたときにも、草加の機嫌はたいへんよかつた。といふよりも、初めて見る紋付羽織姿のぎこちなさからは、昨日まで憑

かれたもののやうにひとつの仕事に夢中になつてゐた彼が感じられなかつた。總べてを忘れて英靈を迎へるための心組が、やさしいまで靜かに出來てゐて、別の意味で何か近寄りたがたいものさへ感じられるのであつた。

家を出ると急に彼の口数は少くなつた。原隊までの汽車の中でも、夫人と向き合つて坐りながら、その視線は常に窓外へ向けられてゐた。それはだが例の探傷器の考案に思索をつづけるさまとは全然異り、やはり父としての感慨を托しただけの、美しく弱弱しいもののやうに見られた。或は窓外の風景も、彼には大陸のそのやうに映じてゐたかも知れず、そして自然にくりひろげられる風景も、一人息子が戦死するところであつたであらうが、それはそれとして胸に收めてしまふ様子でしかない。自ら悲しみを招くまいとしてゐるかのやうに、眼をつぶつたまま動かない夫人にも同じことがいへた。語りだすこともなく、語りださなくもわかつてゐる、ひとつの事實に通じてゐるものに、そのときくらゐ私はうたれたためしがない。そして私はそれ故に、今日までの夫婦生活が

あつたのだと、ときに日常の些細な感情問題から、いまはしい事實の現れを豫想した點に、つよい鞭をさへ感じなければならなかつた。更にそしてまた、過去の幾つかの機械の考案も、草加の現在の地位といへども、つまりはそのやうな夫婦生活があつたからこそ可能だつたといふ風にも考へられてくるのであつた。

原隊の人人といつしよに驛のプラットフォームに並び、戦友の胸にいだかれた英靈を迎へたときの夫婦も、私にいつさう大きな感激を與へた。それは全く水のやうな靜けさだといつてよく、何番目かに降された白布に覆はれた箱に、「草加十郎」の名が見えたとき頂點に達したが、かたはらでも草加の涙などゆるさぬほどに澄んだ瞳の氣高さがわかり、ひと眼で靜かに顔を伏せた夫人の面持と共に次第に神神しく思へてきた。護送兵のあとから驛を出るときも、原隊への何町かを歩んでゐるときも、それは文字通り肅肅としてつづけられ、肩を並べてゐる私には自分の靴音のみ氣になつて仕方がないくらいであつた。營庭につくられた祭壇に英靈が安置されると、ただちに慰靈祭が施行される

ことになつたが、遺族席についたときの夫婦からも、底知れない沈黙の谷へはいつて行くさましか見られなかつた。それは勿論いたづらに悲しむといふのではなくて、その日のその瞬間の彼等自身の感激を追ふといつたやうな風情で、居並ぶほかの遺族たちに共通してゐるものにはちがひない。ただ私にちがつてゐると見られたのは、やはり草加の企てつつある仕事の動機に思ひ及んで、その點によけい切實なものがあらうと注意したからであらう。誰より草加の沈黙が恐しいやうに私には思へるのだつた。職場にあるときの彼、修繕作業を指揮してゐるときの彼、車庫の片隅で探傷器製作の失敗を繰返してきた彼、いつさいの煩はしさから逃れるために自宅の居室に鍵まで用ひてゐる彼、さうした日常の彼と考へ合せると、その沈黙の恐しさも單なる恐しさとどまらなかつた。いつ爆發するかも知れないといふやうな恐しさであつた。

それは然し意外に早くやつてきた。慰靈祭の済んだあと、遺骨を渡されるまでに相當の時間があるといふところから、草加の發意で世話になつてきた高橋中尉に面會をもと

め、兵舎の一室に案内されたときのことである。武装をほどいた高橋中尉が現れると、彼はもう待ちかねたといはんばかりに立ちあがり、ろくな挨拶もしないでまるで嗚鳴るやうな聲で、いつかお話ししたやつが完成しましたよ、といふのであつた。すでに四十歳を越えてゐるかと思はれる、年輩らしい落ちつき感じられる高橋中尉も、それにはさすがにびつくりしたらしく不審げに草加の顔を見まもつた。然し草加はなほもおかまひなしに、それを今日はあなたにも喜んで貰はうと思つてやつてきたといひ放ち、幾らか誇らしげな笑顔さへつくつて見せた。

「何でしたかな……ちよつと、思ひだせないのですが……」

席についた高橋中尉に、かたはらから私が簡単に探傷器のことを紹介すると、やうやく膝をたいてさうでしたか、それは結構だとあらためて草加の方を見やりながらいつた。それで草加もよけい乗氣になり、まるで親近のものとも話すやうな調子でいつた。「近いうちに持つてきますから見て下さい、私は戦場で使つて貰ひたいと思つてゐるん

ですが……さうなつたら私はどんなに嬉しいかわかりませんが、死んでもいいと思つてゐます」

「すつかり出来あがつてゐるんですね？」と高橋中尉はたづねた。

「出来てます、持つて来いと仰言るんならいつでも持つて来ます」

私は草加の横顔を見た。本當に出来てゐるのかどうかたしかめようといふのではなく、どうしてそのやうなことをいふのか氣になつて仕方がなかつたからである。そして同時に、後後のためにうまく取消して置く必要があるとも考へたのだが、それが私には實行出来なかつた。子供のやうに見えてゐた顔に、初めて私は燃え立つ炎の影を認めた。それは明らかに完成への熱情を示すものであり、自信を物語るものである、といふやうに思はれた。うかうか口をはさんだら、どんな怒りを買ふかわからない、黙つてゐることとで彼に完成をよけい義務づけることも必要のやうに考へられてきた。

そこで私も夫人の心配さうな顔を見て高橋中尉にいつた。

「非公式で結構ですから、持つてきましたら見てやつていただきたいと思いますと思ひます」

「それはこちらから望むところです」と高橋中尉は草加にいつた。

「いつぞやのお話のやうに、數百米手前で軌道の障害を認知出来る可能性があるんですね」

「あります、障害どころか小さな傷でも見つかる筈です、橋梁が破壊されてゐても、流されてゐても、或はまた土砂の崩潰があつても、何もかもわかります、ひとつ残らずわかります」

「素晴らしいですね、是非見せてください」

「そんなこと今からお約束してよろしいんですか、ちゃんと出来あがつてからお願いしたらよろしいぢやありませんか」

きいてゐられなくなつてさういつた夫人に、草加の熱つぼい瞳がきらりと向けられたかと思ふと、すぐに鋭い聲が飛びだした。

「黙つてをれ！」

「けど……」

「女がよけいな口をだすもんぢやない」

然し顔をあからめて黙り込んだ夫人の様子から、早くも高橋中尉はまだ完成してゐないのを見てとつたらしく、それでも探傷器への熱情を失はずにいつた。

「とにかく初めから私もたいへんな仕事だと思つてゐました、本當に完成したらひとつまつ先に見せて貰ひませう」

草加は顔色を變へ、

「完成してゐるんです……出来あがつてゐるんです……そりやもう私がいふんだから間違ひのないところで……」と口泡を飛ばして叫んだ。

高橋中尉は靜かに笑ひながら首肯してゐた。それは彼の言を信じないといふのではなくて、一人息子を戦死させた父親への思ひやりの現れであるのがよくわかつた。草加は

なほも同じことを強調するのであるが、その喰つてかからんばかりの態度は駄駄ツ子に近く、それに好感が持たれるといふよりは、さうした一面が彼の性格とつながつてゐるのがわかるやうな氣もしてくるのである。

やがて高橋中尉も相槌をうつのをやめ、

「今日の英靈のうちの何柱かも、機關乗務員なのです、中には運轉中に彈丸のために倒れたものもありますが、多くはやはり敵の妨害による事故ですよ」とあらたまつて激勵した。

その一言で、ときに狂人のやうにさへ見られた草加の瞳が、俄かに靜かな鋭さを加へたのを私は見遁さなかつた。

「どのやうな妨害にひつかかつたのがいちばん多いですか？」

「さうですね、何といつてもあなたのお子さんの場合のやうに、見通しのきかないところの軌條撤去ですね、ただ一本か二本の軌條を外して置くだけなのです。さうしたとこ

ろは最大限の徐行運轉でのぞむやうに教育してありますし、現地での注意も繰返されてゐるのですが、實際の當事者としては定時運轉をやらうとか、一刻も早く前線の要求を満さうといふ氣持から、同じ結果を招いてしまふのでせう。自分の生命など考へない日本精神の現れですね」

「よくわかります」と草加は鼻にかかつた聲で何度も呟いた。

高橋中尉はちよつと間を置いてからつづけた。

「そのほかには軌道の反轉、つまり線路をそつくりひつくりかへす破壊ですね、爆破も多くなつたといふことです、それから祕密破壊といふのもあります、これにも相當困つてゐるやうです」

「どんなにするんでせうか？」

「一見したくらはわからぬやうにやるわけですね、軌條の釘を片側だけぬいて置くとか、ぬいたあとへ砂などつめて釘に見せかけるとか、そんな手まで弄してゐます；

……」

そして高橋中尉は聲を高め、その軌道探傷器とやらいふのは、さうした脱釘障害などの發見などにも役立つのかと、相手の顔を覗込むやうにしてたづねた。すると草加もすぐに出來ると斷言したが、それは不意の質問に面喰つた彼の意圖にもない、その場だけの返事のやうに見られないでもなかつた。たとへ何百米かの軌條の磁化に成功することが出來るにしろ、同時に躰の大半を枕木の中に埋めてゐる釘にまで及ぼし、その有無を知る事など不可能のやうに私には思はれた。然し彼が、さうしたことの可能不可能の問題を越えて、ただちに考慮にいれ始めたらしいのは、僅かな眉宇の動きにも私は見ることが出來た。

「私たちに出來ることならどのやうなご援助でもしますから、どしどしといひつけて下さい」

最後に高橋中尉はさういつて立ちあがつた。英靈を受領するやうにといふ知らせがき



たのだが、同時に草加の童顔もたちまちにひきしまり、夢の世界から現實にひきもどされた感じで、再び痛痛しいほどの沈黙の中へはいつて行つた。

それから三十分後、白布に覆はれた遺骨をささげ持つた草加を中にして私たちは衛門を出たが、そのときの草加の幾らか前こごみになつてゐる姿勢と着い顔の表情とからは、來るときとは全然ちがふかくしきれない激しい憤りの現れが見られた。曾て彼は私に十郎戦死の通知を受取つた際の感慨を、そのときくらゐ支那兵が憎らしく思へたことはいといふ言葉で表現したが、すでにさうした言葉などでは表現出來ないもののやうであつた。

## 第七章

市葬は一ヶ月後になるだらうといふ話だつたが、四、五日草加も休んで靈を慰めたいといふので、その間私は例の三百圓を工面し、必要の部分品を入手してとどける旨を約束したが、すぐさま大山みつ子を訪ねる氣にもなれなかつた。それは初めて會つたときの彼女の印象が、單なる男まさりだといふ程度ではなくなり、容易に金はださないだらうといふ臆測より、うかうか出たら丸めこまれてしまひさうな不安に變つてゐたからでもあり、さうなつたときの自分の不甲斐ない姿まで想像されるからでもあつた。にもかかはらず一面には、英靈が歸還したといふ事實の前には誰でもが頭を下げるといふ常識から、案外うまくすすめられるのではないかと考へられないでもなかつた。さらなれば

初めの不安も、相手は一人の女に過ぎないのだと見くびることで消え去り、私自身の氣弱さが可笑しくなつてもゐた。

然しそのやうな自信は間もなくつがへされてしまつた。ちやうど出かけようと思つてゐた午後のことである。はからずも山邊要藏と藤井達郎の二人が訪ねてき、いま草加君にも會つてきたのだが、草加君はあなたに相談してくれといふのでやつてきたといひ、大山みつ子に關する意外な事實をもたらしした。それは昨夜或所で、藤井達郎が思ひがけなく耳にした話だが、大山みつ子とその唯一の財産ともいふべき住宅を賣るために、だいぶ方方を持廻つてゐるといふことである。ついではこのまま捨てて置いたなら、われわれ債権者は一文も取れずしまひになるかも知れないので、何等か前後策を構する必要がある、とも附加へるのであつた。それには私もあわて、ゆつくり相談するため事務室に案内しようとする、山邊は事務室よりは寒いが人目につかない車庫裏の方がよいといひ、例の通り廻しの片袖を肩へ投げあげたまま先立立つた。あとにつづいた藤

井達郎も、休日でもあるらしく和服姿であつたせむか、小柄な肩をいからせてゐるさまからは現職の機關士が感じられなかつた。

「それが君驚いたことには、實に僅かな金で賣出したんだよ、早く金に換へようといふ腹が見えすくぢやないか」と山邊は車庫裏の空地に蹲み込むといつた。

「どのくらゐです？」

私がたづねると、すでに定年になつてゐるとも見えない藤井達郎が、栗鼠のやうな眼をくるくる廻しながら三千圓だと答へてから、

「いまの三千圓といつても、昔の千圓ぐらゐにしかあつてゐないからね」といつた。

山邊と共にいちど見てゐるとはいへ、私には然しあの海岸の妾宅のやうな家が、どうしても三千圓以上のものに値踏み出来ないばかりでなく、かへつてそれでは高過ぎるやうにさへ思はれ、俄かに二人の意見に賛成出来なかつたにしろ、そのやうに高く見ようとする二人の氣持はわからないでもなかつた。いつかの山邊の話では、彼の知つてゐる

大山みつ子への債権者は、彼と草加とのほかに六人となり、総額は私の概算でも七、八千圓に達してゐることから考へれば、いざといふ場合に處分出來さうなたつたひとつのものを、三千圓程度に見つめることは出來ないにちがひない。實際にそれくらゐの價值しかないものにしろ、何とかして總額にちかい金で賣りたく思ふのは、誰にしても當然であらう。そこで私は實際問題として、恐らくはもう草加もだしただけの金は取戻せないであらうと、人事ながら考へないわけにはいかなかつた。

「話はほかのひとにも傳へたんですか？」と私は山邊にたづねた。

すると山邊は首をかしげて私を見た。

「ほかのひとといふと？」

「森田、大畑、青田といふ連中ですよ」

彼は私を一笑に附した。

「あとでいいでせう、いまから多勢だとうるさいばかりで、どうにもまとまりがつかない

くなる、ちやんときまつてから知らせてやつた方がいい」

「然しまたあとで文句が出て困りますよ」

「大丈夫：：私が責任を持つことにしよう、同じ債権者だといつても、連中には僅かだし、それに大事なつとめもあることだから、こつちで適當にやつた方がためになるでせう」

それがどのやうなことを意味してゐるのか、私にはよくわからなかつたが、同じ大事なつとめを持つてゐる藤井達郎が、それがいい、それがいいと相槌をうつたのも意外であつた。私はすでに二人の間では何か特別の相談が交され、同じ権利をもつてゐるものをだしぬくのではないかと、早くも疑ひをさしはさまないでもゐられなかつたが、それにもかかはらず草加にだけ——つまり私にだけ参加をゆるす遣口までがあやしまれ、うかうか出來ないといふ風にも思はれてきた。さうしたことから私の考慮は、早急に草加が三百圓を欲しがつてゐる事實を口にさせなかつた。いそぐといつそう不利な立場に置

かれてしまはれさうに思へたからである。然しまた私には、問題がここにまで立至つたのを山邊が草加に話したかどうか、妙に氣にもなつてきた。

「そりや話しましたが、話してはいけなかつたのかしら？」と山邊は私にききかへした。

「そんなこともありませんが」と私もあわてて否定してから、

「どんな様子だつたでせうか？」

「あつさりしてゐましたね、あまりこつちが意氣込んでゐたせいでせうか、かへつて拍子ぬけのした態でね……」

「何かやつてゐたやうですか？」

「さあ、そんな風でもなかつたが、久し振だつたので、やはり先生も年齢をとつたわい、と思ひましたよ」

ニヤニヤ笑ひながら山邊は眼深かに冠つてゐる中折帽を阿彌陀にあげたが、いつそ

私には草加の本心がわかるやうな氣もし、新たな責任を感じないではゐられなくなつた。私には是が非でもよろしく頼むといひ、その私ですら驚いたことに別段これといふ意見も述べず、ただ私に一任してあるといふことで済ますことが出来るのだから、よくよくのことにちがひなかつた。すでに大山みつ子との問題などあきらめてをり、差當つて必要な金を得ることとは別個に考へてゐるかも知れないが、それでは現實問題としてうまくいかないのがわかつてゐるのだから、どうしても私はその場の相談にうまく乗るよりほかに仕方がないと思つた。

然しその相談といつても簡単なことで、要するに大山みつ子が金を返して寄越すまで家を抵當に取つて置くか、若し金のとれる見込みが全然ないやうだつたら、すぐにでも處分してしまふか、その何れかである。それについての山邊の意見はやはり後者で、大山みつ子をだまして鐵工所を取りあげた吉野良作といふのは、いちど會つたが全く海千山千のしたたかもので、ああいふものにかかりあつてゐればゐるほど、損害が大きくな

つてしまふといふのであつた。どのやうなことをいつてゐたかとたづねると、自分はただ大山みつ子が経営困難に陥つてゐた鐵工所を、借金を拂つてやることで譲り受けただけで、それ以外の何物にも關與する義務はないといひ、實はまだ彼女に債権があるので、場合によつては新しい對策をたてようかと思つてゐると嘯く始末で、あまり執拗に切込むと蝮蛇になる恐れがある、と答へるのである。そして山邊はつづけて、この際もうやむを得ないから、古くとも何でもあの家をこつちのものにしてしまふに如くはない、と強調するのであつた。さういふ山邊の風貌には、いつかの大山みつ子を訪ねた際の小金貸らしいだけけしきもなく、やはり大物を前にすると駄目なのだと思つて禁ずることが出来なかつた。然し意外にも藤井達郎が、それも一策だがといふ切出しで反對した。その如何にも狡るさうな眼を何れかといへば私にそそぎながら、もつと手つ取り早い方法がよいといふのである。どのやうな方法があるかときいてみると、これまでの仕打ちから考へても、大山みつ子も一筋縄ではどうにもなりさうになく、得體の知れない

紐もついてゐることだから、警察へ訴へた方がよいといひ、ちやうど自分も警察に知人があるので、そのひとにきいてみよう、といふのであつた。それも私には一應もつとも思へたが、水壓試験器の問題で私が草加の家を訪ねた夜のこと、はからずも暗い路地で會つたときの彼の言葉が思ひ浮んだ。大山みつ子を訪ねた際の様子を、山邊にはきいたが全部信用することも出来ないの、お前さんのところへ行くところだ、といつた言葉である。それやこれやを考へ合せると、それが單に藤井達郎らしいといふばかりでなく、すでに山邊と腹を同じくしてゐると見た私の臆測が、全く誤つてゐたのがわかつてきた。やはりそれぞれの立場からの急の解決をのぞんでゐるのに過ぎないのである。何れともつかずにある私に、暫くすると山邊は殊更に聲を落していつた。「どつちしてもあなたの意見をきいてからきめた方がいいと思ふが、すぐに警察問題にするのは考へもんぢやないかな」

「どうして？」と藤井は向き直つた。

「ぐづぐづしてるよりよつぽどいいぢやないか！」

然し山邊は一瞥もくれず薄ら笑ひをもらし、獨り合點に何度も首肯しながらいつた。

「まだ警察の厄介になるのは早い、手に負へなくなつてゐるのならまだしも、これからやつてみようといふところだからね」

「いやもう手に負へない感じだ、生やさしい手段ではとても勝てない、かうして相談しなければならなくなつたといふこと自體からしてさうだよ」

山邊は間を置いてから、

「時代が時代だからね、それをよく考へなくちやならない……」

「といふと？」

「つまり何だよ、私はお上の手を煩はしたくない、この時代につまらぬ問題など持ち込んで申譯ないぢやないか」

「いや、私はまた悪者がゐるといふことを知らせるんだから、かへつておほめの言葉に

あづかるかも知れないと思つてゐるんだが……」

「冗談ぢやない」と山邊は笑つた。

「とにかく警察を煩はすことはよさう、みつともない」

「そんなことはない、貸した金をとつて貰ふんだから……」

それにはもう山邊は答へなかつたが、彼が私に向けた苦苦しい微笑から、藤井に反対する彼の本心とその言葉面にだけあるのではないのを見てとることが出来た。その考慮は彼の職業的なもので、彼自身の弱點を知るところからなされてゐる。下手に警察などへ出たら、たとへ一度か二度にしろ、高利をとつたといふ責からは遁れられないだらう、と思つてゐるにちがひない。それに藤井は氣がつかないにちがひないが、三十年もかけて蓄めた金を初めてだした彼にすれば、たとへ氣がついてゐてもそのことなど問題でなく、ただ一途に確實な方法をと思ひ主張するのであらう。そのやうに思ひやると私にはすでに、何れに賛成したらよいものやらわからなくなり、何度促されても曖昧な返

事をするよりほかに仕方がなかつた。

一時間も経つたであらうか。結局妥協點を見出せず、かへつて次第に感情的になりつつあるやうなので、それではあらためて森田、大畑、青田、深山、村田などにも知らせ、みな意見をきいてみたらよからうと提唱すると、不思議にも二人の態度が俄かに變つた。さうなつたらよけい面倒になるだらう、といふ點では全く一致してをり、それはいけないと反對するのである。

そこで私も飛んでもない調停を買つて出る氣になり、

「それではどつちかにきめたらどうです」と迫つたものである。

すると山邊がやうやく妥協案を持ち出した。

「兩方やつてみることにしませうか、一方はさつそく今夜でも大山みつ子を訪ねてあつてみる、同時に藤井君にはその警察の方に話して貰ふ、然し何ですよ、ただそれとなく個人的にこんな問題があるがどんなものかときく程度だね、その點知人だといふんだ

から都合がいいが、それくらゐでどうだらう」

「仕方がない、さうしよう」と藤井も不承不承に呟いた。

それでやうやく立ちあがつたが、その夜又もや山邊と二人で大山みつ子の家を訪ねるのだと思ふと、前回の失敗がものをいつてゐるにちがひなく、さつぱり私には自信も持てなかつた。よしんば成功するにしろ、ここ數日の間ではどうにもなりさうにないのだから、すぐに必要の三百圓は、別に考へなければなるまいと思つた。

終業の汽笛が鳴ると間もなく、私は約束の海岸に近い十字路へ行つてみたが、そこにはまた山邊の姿が見えないで、暫くすると藤井達郎がやつてきた。どうしたのかとたづねると、變に彼はてれくさげに私の顔を見ないやうにしながら、自分もいつしよに行つてよいだらう、といふのである。それが如何にも彼らしく、氣になつて仕方がないとい

ふ感じでもあつたので、私が笑つて更に警察の方へはまだ行かなかつたのかときき返すと、いつそ彼は當感げな色を見せ、行つてはきたがうまくいかなかつたと答へた。それはやはり私たちの想像通り、相手に能力があつて返さないとか、詐欺を働いたとかいふのならともかく、目下の程度では當事者自身の間で解決した方が、かへつて得策だらう、といはれて歸つてきたといふのである。そして相手は法律の裏をかいてやつてゐるのだから、こつちもみつしりかからなければなるまいと、例の眼をきよろつかせながら婁んで見せるのであつた。それが如何にも眞劍なので、かへつて私には可笑しくてならなかつたが、こらへるために相槌をうつてゐると、ふと彼は思ひだしたといふやうに突拍子もなく、

「それからもうひとつ、困つたことが出來ちやつたよ」

といつた。それに私も思はずあたりを見廻した。

「叱られたんですか？」

「いやさうぢやない、その問題ぢやない、ほかの連中も大山みつ子が家を賣出したといふことを、どこからかきき込んだらしい、それで森田が俺の家に相談にきたわけさ、あいつの耳にはいつたらすぐみんなに知れてしまふだらう」

「それでどうしました、うちあけてしまひましたか？」

「嘘をつくわけにもいかんからね」と彼は吃りながらいつた。

「話だけはしてやつた、するとどうだらう、自分もきいてこのままにもしてゐられないから、いつしよに連れてつてくれといふんだ」

「なるほどね」

「然し、さう多勢で行つても仕方がないと思つて、とにかく自分たちにまかせてくれればわるいやうにはしないからといつても、奴さん、なかなか承知しさうにない、本當にひどい目にあはされた」

さういふ彼の氣持がわからないでもなかつたが、



「いつしよにつれてつてもいいぢやありませんか」といつた。  
相手は口さきをとがらせた。

「少い方がいい、大げさになるとやはりいけない」

「然しよく黙つて引つこみましたね」

「いや、なかなか引つこまなかつた、胡麻かされちやいけないとでも思つたんだらうが、  
本當に冗談ぢやない」

さうして笑ふさまから、晝間山邊と二人が他のものに知らせようといつた私に強硬に  
反対したことを思ひだし、そこに何か尋常でない腹があるやうにも考へられてきた。そ  
れは二人とも意識してゐないかも知れない。いやゐないであらう。三人きりで出かけよ  
うといふのも、單に目立つことを恐れての考慮からで、別に他意あるやうにも見えない  
が、それだけに實際に幾らかの金が取戻せたとすると、思ひがけない問題がもちあがり  
はしないかといふ不安もある。さうなると私も、よほどしつかりしてかからないと、二

度と草加に顔向け出来なくなるやうな結果に陥ることが考へられ、自ら身のひきしまる  
やうな感じに襲はれた。然しまたすぐに私には、そのやうな藤井と山邊が、どうして草加  
にだけはわざわざ訪問してまで知らせ、當人のわがままできいて代理の私を同行する  
氣になつたのか、その點が不思議に思へてきた。二人きりでやつたらよささうなもので  
ある。それを山邊は、ほかのものは小額だからといふやうないひかたで、草加を加へた  
理由を明らかにしてゐるのからすれば、案外の人の好さもわかり、さほど心配する必要  
ないやうにも思ひなほされてくるのであつた。

「それでも連中もすいぶんびつくりしてるでせうね」と私はいつた。

「いま頃はみんながあつまつて、てんでんにいきまいてるかも知れない……人事ぢや  
ないよ」

「それにしてもいままでよく黙つてみましたね」

「やはり山邊が抑へてゐたのさ、期限にさへなれば何とかしてやる、といふ具合に……」

こつちもその一人だがね」

「山邊さんはどれくらゐだしてゐるんでせう？」

「さうだね」と藤井はちよつと首をかたむけたが、

「三本はだしてゐるだらう」

「……？」

「三千圓はまちがひない……ひとよりよけい汁を吸ふつもりだつたんだから、よけい心配しなくちやなくなつた、面白いといへば面白い」

さういつてまたもや笑ひだした彼に、共鳴する意味からでなく私はそれまででない好感をいだいた。それは彼自身を山邊を語ることで遺憾なく發揮してゐるやうに思へたからであつた。そして自然に私の唇には、それならあなたの出金額はどれほどなのかと出かかつたが、やうやく嘯みつぶすことが出来た。

山邊の姿が見えたのはそれから間もない。然し、約束の時間よりだいぶ遅れてゐたの

で、何か變つたことでもあつたのかとたづねるとやはり、出かけようとしたところへ森田の奴がやつてきたので、納得させて歸すのに手間どつたのだと答へた。そして藤井達郎に、それでは彼は私と別れてからあなたの方へ廻つたにちがひないが、ものわがりのわるい奴ですなといはれ、瞬間あやしげに瞳を光らせたやうだが、すぐに持前の大げさな笑ひかたで肩をゆすぶつた。

「それが初めはえらい勢ひだつたよ、まるで俺にでも貸したやうなつもりで、すぐに返してくれ、返してくれなければ出るところへ出てやる、あの金は自分ではなくて、死んだ親爺が残して行つたのだから、いいかげんにされたんちや申譯ない、とかういふんだ、いまにも亂暴でも働かんばかりの權幕ぢやないか」

「いや、あの男ならやりかねませんよ」と藤井も相槌をうつた。

山邊は海岸通りの方へ歩きながらつづけた。

「とにかく年齢に似合はない男だよ、いちどいひだしたらなかなかきかないところがあ

つてね」

「全く……若いもんは小金を持たせるのはよくない」

「きたなくなるね、森田なんてのはその代表的な人物だよ」

「それにしてもよくかへりましたね」

「本當に……」

感心する山邊の表情には、それまでにない弱気がかけをつくつてゐるやうに見られた。やはり何か氣に残るものがあるにちがひない。そして暫くは黙つたまま歩いてゐたが、やがて海岸通りへ出ると獨り言のやうに、かへつて多勢の方がよかつたかも知れないね、と呟いた。すると藤井も心配しだし、いつたい森田の奴どんなことをしたんです、とたづねた。然し山邊はそれには答へないで、相手は女だからだよと薄ら笑ひをもらしたけれど、さうした意見が森田三左衛門と會つたことから出たのであらうことは明らかであつた。森田三左衛門といふのは、まだ四十歳に間のある機關士でふだんは非常

におとなしい男だつたが、それだけにいざとなるとどんなことをするかわからない、底知れない感じのする男であつた。その男が、どのやうに山邊に迫つたかといふことより、私には山邊にもさうした男を苦手としなければならぬ性格のあるのがわかり、いささか微笑ましい氣持でもあつた。然し、海上からの風に吹きさらされながら、いつか自動車で行つたことのある暗い道を、三十分近くも歩き、やうやく辿りついた松林の入口で不意に待つてゐましたよと聲をかけてきた男が、森田三左衛門であつたのは私もぎよつとした。それより山邊、藤井の驚きは更に大きかつたらしく、暫くはあつけにとられた態で相手の顔を見まもつてゐた。

それには森田も幾らかてれくさげに、

「どう考へても重要な問題ですからね、我我もひとつおともさせて貰ひますよ」といつたが、その我我といふのに氣がつくより先に、その背後にもう一人の男のゐるのを見た。「誰です？」と私はたづねた。

「深山君だよ」

代つて答へた森田がちやうど今日同じ機関車に乗つたものだから、いつしよにきて貰つたと説明すると、機関助士の深山哲夫も顔をだした。やはり債権者の一人だが、同じ機関助士の村田温一郎と共に、何回受けても機関士の試験に合格しないところから、申合せたやうに貯金を志した男で、年齢は森田より多い筈であつた。

「どうしたもんだらうな」と山邊がいつた。

それは思ひあぐねた末の言葉のやうであつたが、いちどはかへつて多勢の方がよいかも知れない、といつてゐて思はず出た言葉のやうでもあつた。けれども藤井が別に意見を述べないので、更に同じ言葉を繰返し、ここまでできてしまつたのだから、いつしよに行つて貰はうぢやないか、とまでいつた。

すると藤井も仕方なささうに、

「さうませう、……」と賛成した。

然しそのときはもう、森田も深山も先に立ち、つれて行くも行かないといはぬばかりに歩んでゐた。森田、深山、藤井、山邊、それに私の五人である。これくらゐ兵隊がそろへば、トーチカのひとつぐらゐ占領出来るよ、と藤井と肩を並べた山邊が皮肉な口振でいつたが、私はすでにこれだけのものに押しかけられた大山みつ子が、どのやうな態度に出るであらうかと空想し、何か楽しみに近い氣持にさへなつてゐた。それはひとつには、前回の訪問の結果から考へると、單に失敗に終つたばかりでなく、二人して手玉にとられた感じでもあり、それへの復讐心が首をもたげ始めたからにちがひない。「びつくりするでせうね」と私は山邊にいつた。

山邊も笑ひながら、

「ああいふ女だから、かへつて喜ぶかも知れないぜ、男の方がこんなに多勢見えて嬉しい、なんて……」

「全く……初めはそんな風でもなかつたが……」と藤井が口をはさんだ。

「昔は藝者をやつたとかいふことですからね、油断が出来ませんよ、いろでだまされたんならあきらめもつくけれど……」

「うまいこといつて、案外惚れてゐるんじゃないか」

「飛んでもない」

わざとらしく笑ふ二人を私も笑ひながら制した。近づいたのである。さきの森田と深山の二人は、すでに門の前で待つてゐた。

氣にかけてゐた吉野良作がゐる様子もなく、すぐに大山みつ子が現れて座敷に案内されたが、初めの豫期してゐたやうな落ちつきかたにもかかはらず、五人のものがぞろぞろとつづいてあがつたのには、さすがに顔色が變つたやうであつた。然し座についたときには以前の彼女にもどり、わるびれてゐる様子もなかつた。そして時折それとなく私

たちの方を窺ふ。それからは初対面のとき以上のふてぶてしさが、不思議な美しさの中に見られた。

そのやうなことにはおかまひなく、ひと通り訪問の理由を説明した山邊は、ぐつと上體を前に倒したままで首をもたげ、あらためて室内を見廻してから、

「これを手放すご決心がついたといふことではありませんかい」と相手の顔を覗き込んだ。

相手の美しい眼眸は震へた。

「飛んでもないことです、どなたがそのやうにおつしやいました？」

「どなたといふほどでもありませんが、年寄は耳ざといといふものですからね……ひとつ、安心させて貰へませんか」

「と申しますと、期限前に返せとおつしやるんですか」

「左様——もう、決して無理ぢやないと思つてますがね」

たたみ込む口上の素早いには、藤井も、森田も、深山もいつしよに感歎の表情をつくつたが、それよりも私の驚きは更に大きかつた。曾て同行してきたときの山邊と、その日の山邊とはまるでちがつてゐた。何れかといへば前の山邊は、口でこそ草加のためだとか、或は探傷器のためだとかいつてくれたが、どこか傍觀者のな落ちつきを見せてゐたものである。大山みつ子にたいしても、若干不満に思へるほど同情的な態度をとり、性急な私をあやしませた瞬間も少なくなかつた。それが今度は別人と思はれるほどに冷く、きびしい態度でもあつた。

然し大山みつ子もさるものだつた。そのまま負けて引つ込みもしなければ黙り込みもしなかつた。

「でも——」と彼女はいつた。

「私にもいろいろ都合がございますから、やはりお約束通りにしていただかなければなりません」

山邊は顔をゆがめて笑つた。

「ねえ、奥さん、かうして大の男が五人もそろつてきてゐるんですからね、ちつとは變つた返事をきかせていただきたいですね」

「と申しましても、これが初めてではございませんか、この前はたしか草加さんの問題だつた筈です」

「同じちやありませんか、草加君の場合でも僕等の場合でも……」

「いいえ、あのときは私も、草加さんのお氣の毒な立場をおききしまして、それからはお一人だけでも早く何とかしてあげなければならぬ、と心がけるやうになつたんでございます」

「なるほどね」と山邊はわざとらしく首肯してみせた。

大山みつ子は私の顔をチラと見てからいつた。

「あの草加さんの探傷器とやらいふ機械は、もう出来たんでございますか……私もして

あげたいことが出来ないものですから、思ひだしては氣にしておりました」

「奥さん」と山邊が遮つた。

「こつちは眞劍ですぜ、そらさんで貰ひませう」

「別にそらすといふわけでも……」

「ないとおつしやいますか、それではひとつしつかりしたところをきかせていただかうぢやありませんか」

大山みつ子はちよつと思案げにうつむいた。

「それは何度申しあげても同じです、期限がくるまではどうにもなりませんもの」

「もつともらしい話だが、出鱈目もいいかげんにしたらどうです！」

山邊は居並ぶものに顎をしやくつて見せ、暫く相手の顔を睨んでゐたが、やがて本性を現した。いくらお前さんがかくしても、お前さんと吉野良作との關係から、鐵工所がどのやうに處分されたかといふことも、それからまたこの家が、どこへ持込まれたとい

ふことまで、すつかりわかつてゐるのだと述べ、すぐに出るところへ出ることも知つてゐるが、それではあまり人情がなさすぎるだらうと思つてきたのだといつた。

すると藤井達郎が、安座のままですすみ出た。

「ねえ、大山さん、わし等の金はその邊でつかみ取りしたものぢやありません、二十年がかり、三十年がかりでためたもんばかりですからね、しつかり考へていただきやせう」

「ですから私も、お返ししないとは申しません」

いくらか變つた言葉尻を、山邊はすかさずつかんだ。

「それだけぢや歸れませんよ、ただお氣持だけを伺つたんでは……」

「どのやうにしたらよろしいんです！」と女は情なささうに向き直つた。

山邊はいつさう冷やかにいつた。「この家を渡してくれるか、證文を書直すか、何れかですな」

女が黙り込んだのを見て山邊はつづけた。

「然し、證文の書直しには、金額に相當するものをいれて貰はなくちやなりませんぜ、それは現在のあんたには不可能なのだらう、結局、問題はひとつだと思ひますが、どうでせうな」

「……………」

その頃から私も、やうやく行くところへ行きついたといふ感じで、待つてゐる草加には濟まないが、あきらめるよりほかに仕方がないと思ひ始めた。顔もあげない女の様子から、山邊の調べたことのまちがひでなかつたことと、そこから割出した結論が、如何に馬鹿馬鹿しく不利であるにしろ、最上のものでしょうか思はれなかつたからである。そして同時に私は、早急に草加が必要としてゐる金を、何れから工面したものと考へてゐるうちに、ふと山邊なら貸して貰へさうに思へてきた。それには大山の家を手に入れることで、やがて草加がだした千圓の何分の幾つかで戻つてくる金を抵當にすればよい。

信用貸までする山邊のことだからまちがひない。さう思ふと私も氣が樂になり、その家を得るために協力するために、自然に大山の態度を注意し、急所をねらつて一本まるつもりであつた。

然し私は、さうした折角の山邊の言葉に、藤井以下のひとびとが動搖してゐる事實を見た。それも初めは藤井が、ひそかに山邊の袖を引く程度であつたが、次第に露骨になつてきた。こんな家をとつても仕方がないといふのである。森田も、深山も賛成した。すると山邊もいちどは、大山の手前もあつて苦苦しい表情をつくつたが、すぐにはばかり様子もなく、大聲で藤井達郎をたしなめた。

「それぢや話をあとへ戻すやうなものぢやないか」

「そんなことはない」と藤井も負けてはゐなかつた。

「いや、さうだ、金を要求しても駄目なのがわかつたから家を貰ひたい、といふことになつたんだぜ」



「然し、あんまりあつさりし過ぎてやしないか」

「ぢや、どうすればいいんだ」

藤井の視線が、援助をもとめて他のものの顔へ動いたが、別に助言がきかれさうにな  
いと見たのであらう。

「何とかして貰はうぢやないか、俺たちは金でなくぢやごめん蒙る」

「その金が出るまで、待つてゐようといふわけだな」と山邊は皮肉な微笑を浮べて一  
同を見廻した。

それでも藤井は暫くすると、突然両手を疊について躰をぶらんこにし、ぐつと大山み  
つ子の前へすすみ出た。

「ねえ、奥さん、綺麗にだした金ですぜ、何年も何十年もかかつてつくつたやつを、い  
ちどきにだしたんぢやありませんか、そこるところを考へて、耳をそろへて返してもら  
ひたいもんですね……」

顔もあげられないでゐるくせに、返事ぐらゐしたらどうだ、と森田三左衛門がすつと  
と立ちあがつた。

「そんなことしぢやいかん、いかん」

驚いて兩掌で制した藤井は、いまいまさうにもとの座についた森田を見てから、更  
に女の方へ向き直つた。

「一時、ほかから工面してもよささうなもんだ、その吉野とかいふ男だつて、ちつとは  
あんたの身は思ふだらう、頼んでみたらどうだね……俺らは商賣でも何でもない金を返  
してくれるといふなら、貰つた利子ぐらゐ返してもいい、いや返す……何も俺らは無理  
をいつてるつもりはないんだから……」

「それはもうよくわかつてをります」

さういふ今にも泣きださんばかりの聲を耳にすると、藤井はいつそ乗氣になつたが、  
次第に哀願の態度に變つた。

「お願いする、助けると思つて何とかしてくれ、あの金もどらないとなると、俺たちの老後なんてものもなくなつてしまふ、總べてが駄目になつてしまふ……これから幾らもがいたところで、たかが知れてるんだから、ここは是が非でもまつすぐに解決して貰はなければならぬ……なあ、大山さん、俺は女だと思つて、馬鹿にしてるわけぢやありませんぜ」

「私も決してさう思つてゐるわけでもございません」

「それならひとつ、たしかなところで、安心させて貰へますまいか」

やむなく顔をあげた大山みつ子は、チラと森田と深山の方へ視線を送つてから、まるで嘯くやうな口振で言つた。

「手許にさへございますなら、そりやすぐにでもお返ししたいんですけど……」

「ない袖は振れないといふわけせう」と山邊がはさんだ。

藤井はいまいましさうに舌打した。

「それでいつたいどうしてくれるつもりなんです？ 場合によつちや期日でもかまはないけど、しつかりした見通しをきかせて貰ひたいもんですな」

「……………」

「どうです、大山さん！ 考へてばかりゐたんぢやら、ちがあきませんぜ」

「……………」

「吉野とかいふ人はどうしたんです、男に惚れるのもいいが、何から何までとられてしまふなんて見つともないですぜ、前の旦那にだつて申譯ありますまい、……少しださせたらどうです」

それにはさすがの大山みつ子も、顔色を變へて藤井を睨んでゐたが、やがて再び深々とうつむき、まるで自分自身にでも言ひきかせるやうに、ポツリポツリと辯解し始めた。それは曾て私と山邊が訪ねたときに語つたことと同じで、ただ特に吉野良作との關係についてだけは、別にいかがはしいことはないと強調し、従つてそこから金などだし

て貰へる義理はない、といふのであつた。そして何もかも、自分の失敗に起因するものなだから、自分ひとりで處理するよりほかに仕方がない、ともいふ。それで藤井が満足する筈もなからうと、思はず私も視線を向けたが、女のしみじみした口振に魅せられてしまつたのであらうか、如何にももつともさうに首肯してゐた。それから彼自身が言明したやうに、全く商賣人でない人のよさも感じられ、同時に私の想念は、あらためて大山みつ子の上に向けられてゐた。結果から考へれば、たしかに何人もの大の男を手玉にとつた感じだが、さうしたことを初めから女が意圖したのであらうか、吉野とかいふ男との關係も、本當に彼女自身がいふやうなものかどうか、はつきり私にはわからなかつた。はつきりしてゐるのは、どのやうに善意に考へても、貸した金は期限がきてもとれさうにない、といふことであつた。期限にさへなれば、必ず返すとは何回も繰返してゐるが、それはその場通れの挨拶でしかないやうに思はれた、さうなればもう山邊の主張するやうに、残されてある家を處分するよりほかに如何ともしがたいのである

が、そのことを眞剣に考へるより先に私は、居並ぶ連中の思案げな表情から、又もや抵當ひとつとらずによく貸したものだ、と、皮肉の意味からでなく感心しないではゐられなかつた。

山邊と藤井との間にも氣まづい空氣が残り、藤井と森田、深山との關係も變なものになつた。私もいつそ口重い感じであつたが、何かその邊でうまくとりつくり、意見をまとめて相談のきまるやうにしむけなければならぬと思つてゐると、ふと玄關にあつて人聲がした。途端に私は大山みつ子の顔色を窺つた。何の關係もないと言明した吉野良作が、ひよつこりやつてきたのではないか、とあやしまれたからであつた。然し大山みつ子は、別に、それらしい素振も見せず、應接に出て行くらしい女中の足音がきかれても、甚だ平然たるものであつた。

「大畑さんとおつしやる方が見えまして、奥さんにお目にかかりたいといつてをられませうが……」

襖の隅から顔だけだした女中の言葉に、初めて驚いたのは大山ではなくて、私たちがあつた。大畑といへば炭水手の大畑覺藏にちがひない。一日置の徹夜勤務をつづけ、家では相當手廣く百姓をやつてゐる、債權者の一人なのである。

「おひとりなの？」と大山みつ子は女中にきいた。

「お三人です」と女中は答へた。

それには思はず、私たちも顔を見合せたが、女の驚きも相當に大きかつたらしく、一時はせまい部屋の中を見廻し、どうしたものかと迷つてゐるやうであつた。然し彼女もすぐに、場合によつては女主人に代り、女中において貰はうといはぬばかりの連中の態度に氣づいたのであらう、座を立つて行つた。見送る山邊や藤井の顔には、かうなつたらもう多い方がよいといふあきらめの表情が明らかに現れてゐた。

大畑覺藏を先にして、同じ炭水手の吉田信彦と、機關助士の村田温一郎の三人が、如何にも昂然とはいつてきた。それはだしぬかれた不満からだつたにちがひない。別に先

客に挨拶するでもなく、ただチロチロと人の顔を見廻し、機關助士の村田温一郎の如きは、向き合つてゐる同僚の深山哲夫に、乗務まで休んでくるのなら、自分にも通知してくれてもよかつたらうにと、うらみがましい言葉まで並べたくらゐであつた。

部屋は八疊でも、箆笥や鏡臺などが飾りたてられてあり、八人の客をいれると身動きも出来ない状態で、片隅にちいさくなつてゐる女主人も哀れに見えたが、かへつてまた都合がよくなつたのではないか、といふ風にも思はれた。初めは八人の顔がそろつたさまに、一種壯觀な感じもし、これには如何な大山みつ子と雖も間もなく本音を吐くちがひないと思はれたが、事實は全く反對、妙な沈黙の時間がつづけばつづくほど、それぞれがゐにくい感じに襲はれてきた。初めからの経過を知つてゐるものは知つてゐるだけに、知らないものはまたよけいそれなりに、喋れなくなつた債權者群の不統一振を、あらためて曝露した結果に陥つてしまつたわけである。

それでもやがて山邊はそんなことにおかまひなく、

「奥さん」と呼びかけた。

「私の立場も考へてくれなくちや困りますよ、ここにある人たちは、みんな私の話でだしてくれたんですからね、私の責任にもなつてゐるんです……といつても何も私は、な

いものを持つて行くことも出来ん、この家を貰ふことにしようぢやありませんか」  
すると意外にも、大山みつ子は素直にうなづき、いくらかわざとらしい悲痛な面持をあげた。

「仕方がありません」とすぐにうつむいてしまつた。

山邊は又もや天井を見あげてからいつた。

「ほかにたしかなあてはないでせうな……私が調べた限りではないやうですが……」  
相手が答へなかつたので、更に山邊が同じ言葉を繰返すと、やうやく首肯いたのに私  
も思はず藤井達郎の顔を見た。あれほど金でなければいやだといつてゐたのだから、再  
び何かいひだすにちがひない、と思つたからである。然しそのときはもう観念してしま

つたものらしく、例のくりくりした瞳で、山邊に真似て天井から室内を見廻してゐた。  
あらためて値踏みしてゐるのであらう。

「歩きながら話さう」

あとからきたものに、さういつて立ちあがつた山邊は、ぢや奥さんまた近日中にきま  
すよとばかり、づかづかと玄關の方へ出て行つた。それには大畑覺藏、青田信彦、村田  
温一郎の三人ばかりでなく、私たちもひどく面喰つたがそれ以上ゐても仕方のないのが  
わかつてゐるので、文字通りぞろぞろと立ちあがつた。

廻しを小脇にかかへたまま、山邊は外の暗闇へ出ると、

「やつぱり女は女だよ」と獨り言のやうに呟いた。  
そして自ら否定した。

「いつばい喰はされたやうな氣もするね……こつちにも弱味があるんだから、どうにも  
ならん」

海岸通りへ出ながら、廻しを肩にした山邊は急にみなに詫入るやうな調子で、すでに私などが何回もきいてゐる、大山みつ子の経済的事情を説明し、あのやうにする以外によい方法のないことを強調した。そして残された問題は、あの家を出來るだけ高く賣ること、そのためには全員が協力しなければならぬ、といふことを繰返してゐた。それにまだぶつぶつ文句をつけるものもあつたが、結局はその意見に賛成しないわけにはいかなかつた。

別れぎはに私は、草加のために山邊にこつそりと、然しおそるおそる三百圓の借入れを申込んでみた。山邊は言下に何とかしようとして承諾した。その一言を耳にした私は、急に一夜のおつきあひの容易でなかつたことが、無意味のやうに思はれてきた。

## 第八章

翌朝下宿を出た私は、さつそく草加を訪ねて會談の有様を報告しようと思つたが、考へてみればあまり結果もよくないのだし、それに例の部分品も手にはいつてゐないので、もう一兩日待つて貰ふやうに勝手にきめ、少しく早過ぎると思つたがそのまま職場へ向つた。けれども思ひがけなく驛と機關區の境になつてゐる踏切近くのまがり角で、制帽をきちんと冠つた制服姿の草加と顔を合せた。どこへ出かけるのかとたづねると、さうぢやないと首を振り、出勤するんだよと無造作に答へた。それからは私には尋常でない何物かが感じられ、これを機會にといつては失禮だが、今少し休養した方がよいのではないかとすすめてもみた。一人息子の遺骨を迎へたばかりの身にすれば、やむを得な

いにしろ、いつに變らぬ蒼い顔や、高い鼻や、あやしいまでに鋭い眼が氣になつてしかたがなかつたからである。然し彼は黙つたまま、暫く構内の柵に沿つた道を歩いてゐたが、突然取つてつけたやうに、

「いつまで家にぼんやりしてられない、退屈してくるからね」といつた。

私は相手の横顔をちらと窺つた。彼も退屈などすることがあるのかといふよりは、そのやうな言葉を知つてゐること自體がをかしかつたばかりではなく、何か變つたことがあつたにちがひない、といふ風にも思はれたからであつた。そしてそれが探傷器に根ざしてゐるのは明らかなので、私はさりげなく例の三百圓の工面もついたので、近日中に部分品もとどけられるやうになるだらうといつた。その表情の變化で順調にすすんでゐるかゐないか、またはだいたいの進捗振を見てとることは容易であつた。もつともその日は顔を合せた瞬間から、私にはおよその見當もついてをり、特別の返事を期待したといふわけでもない。

「大山の方はどうなつたらうね？」と思はぬ質問であつた。

いささか面喰つた私が、もう間もない職場への道をゆつくり歩みながら、前日の模様のあらましを話すと、暫くは人事のやうに軽く首肯いきいてゐたが、やがて幾らか心外さうな面持になり、ちよつと立ちどまつて、

「みんながよく承知したね」といつた。

「承知するもしないもないですよ」と私も、相手の不満とするところを不満とし、さう言ひ返さないではゐられなかつた。

彼は歩きだしながらたづねた。

「その家の價値はどれほどあるかしら、負債の總額ぐらゐにはなる見込みなの？」

「さあ——」と私はつまつたが、

「半分にはなるだらう、と山邊さんはいつてましたがね」

そのときも彼の足はとまつた。

「半分？」

「ええ、それもうまく行つたらです、私などの見たところでは、なかなかさういきさうもありませんね」

「それでどうするつもりなんだらう？」

「……………」

「も少し、上手にやれないもんかね」

さういつて、肩をそびやかせながら私をかへりみた彼に、私はかくしきれない反撥を覺えた。それは私の感情からでもあつたにちがひない。何れかといへばそのときの私は自分の不甲斐ない點を責められるより、さうした彼を見せられたことの方がつらい感じであつた。そして一瞬には私も、それならこれからいつしよに、もういちど大山を訪ねて見ようではないかとすすめてみたくなつたくらゐである。それをやうやく抑へた私が、山邊が調べた大山みつ子の經濟事情を説明し、さうする以外に方法のなかつたことを、

自分でもくどいと思はれるほど繰返すと、さすがの草加もやがて納得したらしく、冷い表情をほだいて首肯き、それでは仕方がないとまで呟いたものであつた。

然し、職場の入口に立ちどまり、硝子戸越しに中の様子を窺つてゐた彼は、若干いひにくさうに、

「君はその吉野良作といふ人に會つてみた？」といつた。

「いいえ」と私は虚をつかれた感じで口ごもつた。

「會つてみようぢやないか、君や山邊君をうたがふわけでもないが、會つたら氣が濟みさうな氣もする」

「すぐにですか」

「うん、まだ出勤時刻までには一時間もあるんだから……」

思ひたつたら實行しなければ濟まない性格を、知り過ぎるくらゐ知つてゐる私だつたが、俄に賛成することが出来なかつた。出勤時刻に一時間もあるといつたところで、訪



ねる人はまだ寝てゐるかも知れないし、會つて益のないこともわかり過ぎてゐるのだ。

「お晝の時間がいいぢやありませんか」と私はいつた。

彼も時計を取出して見入つてゐたがわざとらしく總入歯を動かして笑つた。

「さうしよう、あまりびつくりさせてもよくないから」

「山邊さんにもいつしよに行つて貰ひませうか？」

「いや、二人だけで気軽に行つて見よう」

「然し……」

「その方がいい」

妙な獨り合點が理解出来ないまま、事務室にあつても私はいろいろ想像をめぐらせてゐたが、考へれば考へるほどわからなくなつてしまひ、結局はそのやうな一面もあるのだらうときめてもみたけれど、探傷器の考案に必要な以外の金は欲しがらない彼であり、貸したものの取立もひとにまかせつきりに出来る彼であつたのに氣づいたとき、てつき

り私は探傷器の目算がはづれたのではなからうか、といふことに思ひ至つた。若しさうでもなかつたら、時間つぶしに得體の知れない吉野良作など訪ねようと思ふ筈がない。落ちついてゐるやうな態度にも、どこかいらいらしげなところがあり、鷹揚に見えるやうで實はさうでなかつたり、さうした矛盾の現れる理由にもなつてゐるのが、わかってくるのであつた。

それでも彼は約束の時間になり、連れ立つて出た私がそれとなく持ちかけても、少しもそれには乗つてこないで、吉野良作についての空想ばかりを物語つてゐた。會ては地方新聞の社長だつたといふことや、大山みつ子と醜關係のある一般の豫想などから、あれやこれやと勝手な穿鑿を行ひ、こんな時代でなければ現れない人物だと、まるで直接の利害關係などないやうな態度を示した。

そのときは私もつひ、前日の大山みつ子宅の客間の状景を思ひだし、思はずかういつたものである。

「吉野良作もさうですが、大山みつ子だつて同じぢやありませんか、ぐるになつてるからといへばそれまでですが、とにかく圖圖しい點からいつても典型的な存在ですね」  
すると彼も笑つて、

「が、いまの日本にはさうゐないね」

「本當に……さうゐられちやたまりませんもの……」

「その點何だよ、あのやうな女を圖圖しいと思ふ連中の多いのにも驚くね、たとへば山邊とか、森田とか、藤井とか、俺などもその一人にはちがひないが……」

「そんなことはないでせう、草加さんの場合は別ですよ」

「さうかな」と彼は苦苦しく笑つた。

私は意識的に眞剣な表情をつくつた。

「草加さんには金をだした目的がありますからね、それも眞に目的といへる目的ぢやありませんか、……」

「いや、さういつてくれるのは君ばかりかも知れない」

「どうしてでせう？」

「まあいい、俺には理窟はわからん、氣持だけでいつてるんだよ」

人通りのある道中にもかかはらず、彼はわざとらしく大きな聲を立てて笑つた。然し私には不愉快にひびかなかつたばかりでなく、當面してゐる彼の苦惱がわかるやうな氣もし、かへつて私のいつたことが、單なるお世辭にとられやしなかつたかと反省されたくらゐであつた。

漁師町の端れにある鐵工所までは三十分ほどの道のりだつたが、その間にも私はたうとう彼の訪問の眞意を理解することが出来なかつた。殊によつたらうまくいくかも知れない、といふやうな希望を持つてゐる様子もなく、何とかしなければならぬと意氣込んでゐる氣配など勿論ない、やはりただ行つて會ひさへすればよいといはんばかりである。

噂ほどにもない小さな鐵工所の一室で、初対面の挨拶を交した吉野良作は、すでに六十に近いかと思はれる年輩で、小柄で實直さうな男であつた。山邊以上の白い頭髪を持ち、應對にもこせこせしてゐる點が目立ち、地方新聞の社長だつたやうな感じは少しもなく、ましてや大山みづ子とあやしい關係があらうなどは、夢にも考へることが出来なかつた。ただひとつ挨拶しながらも定まることのない、茶褐色の瞳の鋭いのが氣になつたが、それも對座してゐるうちに氣にならなくなる。何れかといへば人のよささうな商人と見られた。

草加には切りだしにくいにちがひない、と思つた私が膝を乗りだすと、奪ふやうに彼はお邪魔した理由はほかでもないかと斷り、テーブルの上に置いた片掌の煙草の煙に見入りながらいつた。

「もう何もかもご承知のことと思ひますが、實はこの鐵工所の前の經營者に、少しばかり金を都合したことがあるんです、それが今になつて返して貰へぬやうな状態になつた

といふことですが、ちよつと考へても信じられない點が、あるもんですから、あなたにでも伺つたらわかりはしないかと思つてやつてきたんです……」

「それはどうも……」と相手は恐縮したやうに額に掌をあてた。

「いつでしたか、同じやうなことで山邊さんとかいふ方も見えましたよ、そのときもハツキリ申上げました、この鐵工所を私が代つてやるやうになるには、相當の金をだしてをりまして、それは殆ど全部大山さんの債權者の方へ手渡したんですが、それには私もびつくりしたくらゐです、いくら女手で經營してゐたにしろ、それだけによけい意外に感じられたのかも知れませんが、とにかくまあさういふわけで、あのひとが以前から握つてゐれば別ですが、私からの分は手にはいつてゐない筈ですよ」

もつともさうに首肯してゐる草加の顔に、これまでとはちがふ隣人にでもたいするやうな親しみを私は感じてゐたが、すぐにそれは破られてしまつた。彼は半分も吸はない煙草の火をもみ消してから、若干性急な口振でたづねた。

「それであんたは何ですか、私たちがだしてゐるといふことは大山から直接おききにならなかつたわけですね」

「さう、山邊さんとかいふひとから初めてきいたんです」

「なるほどね……やつぱり、なかなか大した女ですな」

彼はあわてて口を噤んだが、相手の態度にこれといつて變りのないのに氣づくとはホツとしたのであらう、微かに笑つた。相手も笑ひながらいつた。

「初めは私もそれほどでないと思つてゐましたが、度度會つてゐるうちにたいへんだと思ふやうになりましたわい、全くのしつかりもんでしてな、それでゐて、どうして動きがとれなくなつたのかと、一時は不思議でならなかつたくらゐですよ」

そこで私も、

「何か失敗の原因でもあるんですか？」とたづねてみた。

すると相手は長い眉毛を動かしながら答へた。

「つまりは男にだまされたんですよ、私もよく知りませんが、何でも使つてゐた事務員などとの間によく問題が起きたさうです、そんなのにうまい汁を吸はれてゐたんですね」

「その事務員はいまどうしてゐるんでせう？」

「わかりませんね……一人や二人ではなかつたといふのですから、結局は捨てられてしまつたわけです、残つてゐる職工などは、自業自得だといつてゐます、ちよつと可哀さうな氣もしますね」

相手はポケットからバットと太い象牙のパイプを取出し、つまみだしたバットを眞ん中から二つにちぎり、一つをもとの箱に收めてから、もう一つを叮嚀にパイプにつめてうまさうに吸ひ始めた。私は初めて山邊を訪ねたとき、これは同じ鐵工所に働いてゐる男にいつばい飲ませてきいた話だがと勿體ぶり、吉野と大山との間にはあやしげな關係が結ばれてゐるばかりでなく、それは相當以前からつづけられてをり、そこから彼等の

策略が生れてゐるのは明らかだといはれたことや、大山みつ子の家の近くの煙草屋で老婆にきいたことなどから、ひそかに吉野良作にいただいてゐたものを、完全に奪はれた感じであつた。といふよりは、そのやうなことは何れも根も葉もない、世間の勝手な臆測に過ぎないのが、わかつてきたのである。

その點草加も同じらしく、同じ話にも興味がなくなつたのか、所在げな視線を伏せてゐたので、私は思ひきつてたづねた。

「現在の財産といつたらどのくらゐあるか、あなたにはおわかりにならないでせうね」

「さうですね」と相手はパイプを唾へたまま眉をひそめた。

「ときとしてあるやうな態度に出ることもあるけど、まあ、ないと見る方があつてゐるんぢやないですか」

「あの家はどうして手にいれたんでせう？」

「よく知らないが、最近ぢやないやうですな」

「結局、財産らしい財産といへば、あれだけですな」

「さあ——」と相手は濁して黙つた。

それ以上答へられないのが本當であらう。然し私はふとこのやうな時代に僅か一棟の住宅しか持たないで、當分静養するつもりだといひ、香氣にかまへてゐる女の生活などは、私などにはわからないのかも知れないと思つた。持つてゐないやうでゐて、一、二年の生活費ぐらゐはかくしてあるやうにも思はれ、また案外そのやうなことは氣にならないうで、明日は明日といふ具合に暮してゐるやうにも考へられる。草加たちへの債務をよそに、その家を賣りにだした事實に思ひあたると、若干底の見える感じではあつたが：「そろそろ失禮しよう」と草加がいつた。

吉野良作はあわててパイプを置いた。

「何もおかまひしませんでしたが、もつとくはしく知りたいたとおつしやるんなら、以前から働いてゐるものをりますから、呼んでもよろしいですが」

「いや、よくわかりましたから……」と草加は立ちあがつてゐた。

さうして外へ出た彼は、暫く先に立つて歩いてゐたが、四ツ角をまがると初めて私をかへりみた。

「人間といふやつは、會つてみないとわからないもんだね」

「さうですね」

さうは相槌をうつたものの、私は山邊がみた吉野良作と、私がみたそれとに相當にちがひがあるやうに思はれ、何か空恐ろしい感に囚はれてゐた。

「俺はもうあきらめたよ……本當にかかり合はんやうにする……」と自分自身にいひきかせるやうに草加は呟いた。

それからの數日間といふもの、私は例の三百圓を借りるために山邊を訪ねたり、山邊

といつしよに大山の家を處分する必要から歩いたり、藤井その他のひとびとと會つたり、いろいろと目の廻るほどのいそがしさで暮したが、その間にも草加とはときどき顔を合せてをり、彼の生活態度に著しい變化のあるのにも氣づいてゐた。朝出てくるとすぐに公局報に眼を通し、修繕作業場へ出て行くのは同じだつたが、何れかといへば日常業務への力のいれかたが目立ち、如何にも技工長らしいゆとりも感じられるのである。出来あがつた機關車の點檢も念入りで、本線の試運転にもすすんで出てゆき、技工たちへのあたりもたいへんおだやかになつてゐた。それは技工ならずともよいことにはちがひないが、そこに私は彼自身が何か精神的な打撃を受けてゐるものと、考へないわけにはゆかなかつた。若しさうでなかつたなら、どのやうに職場の仕事がいそがしくともすでに不足してゐる部分品も入手の見込みがついたのだから、探傷器の完成へといそいでゐるにちがひない。彼自身の口から、もう出来てゐるとまで高橋中尉にいつた事實を考へ合せると、よけい私の同じ感は深くなり、やはり今度の計畫も失敗だつたにちがひな

い、と思はざるを得なかつた。

電氣器具屋に金を拂ひ、品物は家の方へとどけてくれるやうに頼んでから、そのことを傳へたときの彼の態度も、前述の判断からすれば意外でも何でもない。まるで職場の仕事の報告でもきいてゐるやうであつた。

「あの電氣器具屋も現金ですからね、金を見せたら初めはないといったものまで持出すぢやありませんか」

さういふ私に彼は、別に嬉しさうな素振も見せず、

「本當にいやな奴だよ」と同感してから、

「そんなにいそがなくともよかつたんだよ」といふのである。

それには私もさうですかと濟ますことが出来なかつた。

「間に合はなかつたんですか」

「さうぢやない、少し考へなくぢやならないところもあつてね」

「計畫に？」

「いや、これは自分自身の氣持の問題なんだから、氣にしないやうにしてくれ給へ」

「大山の問題からさういふ氣持になられたんですか？」と私は意地悪を意識しながらたづねた。

途端に彼の頬を淋しげな微笑の波が通り過ぎた。

「そんなことはどうでもいいぢやないか」

「さうはいきません、私も責任があるわけですから、本當のところを話していただきたいもんです」

「ぢやいふ、大山の問題からではない、それはハッキリしてゐるんだよ」

「それならいいですが……何か私が変わるいやうに思へてなりません」

「いや、さうぢやない」

そして結局はわからないままに終つたが、その後の彼の行動にも、私には不審に思へ

る點が少くなかつた。日常の仕事に熱心なのはよいとして、そのことだけに満足してゐるやうなところもあつて、ときに或は考案を放棄したのではないか、とさへ思へるほどであつた。曾ては休憩時間になると、きまつて車庫の奥の薄暗いところに自分だけの世界をつくり、誰も寄せつけないでゐた彼に、あまりつめない方がよいといつた私だつたが、今度は反對に思ふやうになつてきた。やりかけたものの失敗に氣づいたのなら、それはそれでよい。すでに英靈もついてゐるのだし、手にいれた部分品が全然無駄になるといふこともない筈なのだから、ただちに新しい計畫をたてて貰ひたかつた。まるで憑かれたもののやうに、探傷器以外のことを考へないでゐる彼を、かさねて見るのもつらいけれど、それから全く薄れてしまつたやうな彼と、顔を合せてゐるのはもつと私にはつらいことであつた。機嫌のわるい顔なども、減多に見せなくなつてしまひ、一面の氣安さを私にあたへたのも事實だが、その氣安さにそれまでに感じられなかつた寂寥が伴つてゐるのも事實であつた。

さうした彼が次第に多くの技工たちに喜ばれてきたのも事實であつた。解體機關車の點檢も、修繕作業の指示も、何何の説明も、おだやかにゆきとどいたからにちがひない。すでに何年か使はれたが、こんな技工長は初めてだと、迷懐するものも少くなかつた。

或日の晝食時のことであつた。いつも私はいつしよに辨當箱をひらく習慣だつたので、だいぶ時間の過ぎるのもかまはず待つてゐると、若い技工の一人が使ひにきた。草加に水壓試験器の青寫眞を持つてくるやうにたのまれたといふ。それは私たち自身で試験器を再製するために、草加に借りたことのあるものだ。それをだしてやりながら、どうかしたのかとたづねると、若い技工は技工長が見てくれたんですが、ちよつと青寫眞が入用だといふものですから、と答へてからいつた。

「今日は技工長自身で水壓試験をやつたんですがね、私が見たんではわかりませんが、何だか變だといふことになつて……」



「また壊れたの？」

「いいえ、そんなことはありませんが」

「どこにゐる？」

「修繕線です」

そこで若い技工をさきにし、あとから車庫へ行つてみると、しあがつたばかりの六  
検機關車の下で、水圧試験器を前にした草加が、ほかの技工にしきりと何か喋つてゐ  
る。そして青寫眞がとどけられると、暫く両手でひろげて見入つてゐたが、やがてもと  
のやうにたたんでポケットの中へ押し込み、すぐさまモンキレンチを握つて蹲み込んだ。  
何れかに不良箇所を見出したにちがひないのが、その後の何分か彼の動作でわかつ  
た。然し私は近寄つて行く氣にもなれず、そのまま事務室へとつてかへした。それは勿  
論私たちが再製した試験器の不備を発見された面目なさからではなく、試験器に示す彼  
の心情を考へると、變に面映ゆいものが感じられたからであつた。といつてもそれは單

に私の思ひすぎのやうに考へられないでもなかつたが、更に壊れた當時の彼の態度に思  
ひ至ると、あらためてさうでないのがわかつてくるのであつた。

一時間も経つてからであらうか。バットを吹かしながら彼がはいつてきたとき、私は  
さりげない口振で、

「よくなりましたか？」ときいてみた。

すると彼も平然と答へた。

「やりだすと際限ないけど、もういいよ」

「私たちの仕事がちがつてゐたんでせうか？」

「いや、さうぢやない、使つてゐるうちに狂つてきたんだ……使ひかたが亂暴だからす  
ぐ駄目になつてしまふよ」

さういひながら腰を下すと、すぐに彼は電氣時計を見あげてから辨當箱の風呂敷をほ  
どき、ちよつと失敬するといつて箸をつけた。獨りでさきに濟ませてゐた私も、何本目

かの煙草に火をつけたが、ひと口づつゆつくりと嚙んでゐる食事振を見てゐるうちに、ふと何から何まで變つたといふ感じをいだかせられ、あらためて水壓試験器のことから、探傷器への本心をさぐつてみる氣になつた。

「水壓試験器にはどれくらいわかりましたかね」と私はいつた。

それには草加も返事に迷つて顔をあげた。

「何が？」

「日數ですよ、仕事にかかつてから完成するまでの」

「さうだね」と彼はちよつと小首をかたむけたが、

「半年ぐらゐだらうね、それも思ひついたときから計算したら、一年にはなつてるかも知れない」

「さうでせうね、それでも早いといふ感じでしたが、今度のは何ですね、まだ幾らにもなつてゐませんか」

「探傷器か？」

「ええ」

箸を持つ片掌の指を、順順に折つて眺めてから、彼も何氣なささうに、

「八ヶ月かね」といつた。

そして變に當時の感慨にひたり込む様子なのを、元氣づけるつもりで私は幾らか調子を高めた。

「まだそんなもんでしたか、私はまた一年以上にはなつてるやうに思つてましたがね」

「だつて君、十郎が戦死したのは八ヶ月前だもの……それからやる氣になつたんだから

……」

「さうでしたね……それちや何ですよ、いま出來たんでは、かへつて早過ぎて困るぢやありませんか」と私も自分のいつたことが可笑しくて笑ひだした。

いつしよに彼も苦笑したが、

「別に困ることもない、出来つこないんだからね」と自嘲的に吹き、次には辨當箱をかへ込むやうにして喰ひ始めるのである。

それには私もぎくんとし、ひよつとしたら仕事の困難さに負けて、あきらめてしまつたのではないか、といふ不安にまたもや捉はれた。鐵工所を訪ねて以來の、日常生活の急變振を思ふにつけても、同じ不安は大きくなるばかりであつた。

そこで私も彼が、同じ話題を避けてゐる様子に氣づきながらも、思ひきつてかういつてみた。

「ねえ、草加さん、私も少し研究したいと思つてゐるんですが、いちど本省へ行つて、いつかのお話の丸山技師に會つてみようぢやありませんか」

草加は辨當箱をつつんでから、さも不愉快さうにいつた。

「そしてどうするの？」

「いろいろきいてみたらどうかと思ふんです、参考になるやうな話も出るでせうからね」

「出やしないよ」と彼は決然といつた。

「あのひとにわかつてゐることは、こつちでもわかつてゐるんだから……無駄だよ」

それには返す言葉もなかつたが、同時に私はさうした彼の言動のうちに、まだ残つてゐるもののあるのに氣づき、かへつて心の安まる思ひで話の方向をそらした。

「新しい計畫は出来たんですか？」

「といふと？」

いぶかしげな相手の瞳を私は見つめた。

「今度のやつですよ……毎日、いまにいい話が出るか、出るかと待つてゐるんです」

「そんなものはありやしないよ」と彼は不満さうに叫んだ。

私も皮肉に、

「私はまた先日までの分を中止してゐるんで、新しい計畫をたててゐるのだとばかり思ひ込んでゐましたよ」

「別に……」

「ぢや、つづけてゐるんですか」

「いや、つづけてもゐないが、考へることもあるのでそのままにしてある」

「やつぱり中止ぢやありませんか」と私は笑つた。

然し彼は笑はなかつた。

「さうぢやないよ、中止といふのは、その計畫を放棄することだらう？」

「草加さんはどうなんです？」

「放棄しやしない……こんな話はもうやめようぢやないか」

恰度そのとき、機關區長からの電話があつて彼はテーブルの上の書類をあつめて出て行つたが、それからはやはり年輩らしい落ちつきかたを好ましく見てとることが出来た。然しそれにしても私には、その數ヶ月來の彼の探傷器への熱情がなつかしまれ、腹底にあるものをたしかめることが出来たと思ひながらも、いささか淋しい感じでもあつ

た。

規則正しい勤務がつづき、日常の業務成績も次第にあがつて、修繕場の技工たちの動作もたいへん活氣を呈してきたが、相變らず草加は探傷器にかかりさうもなく、再び私をあやしませたが、さうした或朝草加夫人が休暇を貰ひたいといつてきた。瞬間に私はいよいよ始めるな、と思つたが、どうかしたのかときいてみると、躰がわるくて休んでゐる、といふことであつた。

「いちど起きたんですけど、少しめまひがするといひだしたものですから……」と夫人に附加へた。

私は職場の用事もあるので、すぐに見舞つてやらうと思つたが、

「疲れが出たんぢやないですか？」とたづねてみた。

「やはり年齢としのせいでせう、無理もきかなくなつたやうですから……」

「お宅では相變らずやつてをられるんでせう？」

「あの機械のことですか？」

「ええ」

「それが私にはわかりませんの、やつてゐるのかゐらないのか、或時はやつてるやうにも思へますし、全然あきらめてしまつたやうに見えることもございます」

夫人の瞳が、淋しげに震へてゐるのを、私はみた。

「いつかの部分品はとどいてゐるんでせうね？」

「をります」

「お使いになりましたか？」

「いいえ、そのままのやうです」

申譯なささうに夫人は俯向いた。私はいつそう草加に會つてみたくなり、見て貰はな

ければならない書類をまとめていつしよに出た。そのときはもう、病氣を見舞ふといふやうな氣持は全然なく、場合によつては眞向から探傷器の完成のために、激勵してやるつもりであつた。そのやうな私に問はるるままに、夫人はその後のおだやかな日常生活を、何れかといへば好ましげに話してくれたが、それと職場生活とを思ひ合せられる私には、かへつて傍觀出來ない焦燥しか感じられなかつた。夫人もいつたやうに、やはりあきらめてしまつたのではなからうか。

「夢中になつてられるのもいやですが、現在のやうでも何だかゝたたまらない氣持です」と夫人は微かに笑ひながらいつた。

「市葬でも済んだら、また變つてくるでせうから、あまり奥さんは氣になさらない方がいいですね」と私はいつた。

「いつ頃になるでせう？」

「市葬ですか？」

夫人は黙つたまま首肯いた。

「もう間もなくでせうが、明日にでもいちど連絡とつてみませう」

「お願いいたします」

そして次第に歩調をゆるめる夫人の様子から、今更のやうに私は胸を衝かれる感じだつたが、同時に恐らくはその市葬を待つて仕事を止めてゐるにちがひない、草加の氣持がわかるやうな氣がした。一時は英靈がつくまでに、是が非でもやり終せるといつてゐたのも、單なるあせりからでなかつたのが、理解されてくるのである。

靴あとが氣になるほど玄關さきが綺麗になつてゐた。まだ朝の感じからでもあらうが、家の中はいつにないしいんとした静けさに満ち、格子をあけた夫人にどうぞとすすめられても、ちよつとはいりがたい氣持であつた。

「もう加減もよいやうですから……」と茶の間から引返してきた夫人はいつた。私は心にもなく遠慮して、

「休んでをられるんぢやないですか？」

「いいえ、起きてをります」

それでは、と私は靴の紐を解いて茶の間へはいつたが、いつもとちがつて襖のあいてゐるのにすぐ氣がついた。そこに鍵のあるのを豫期してゐたわけでもないのに、いささか失望の感もあつて、會はないうちから草加がよそよそしく思へてならなかつた。然し次の瞬間、草加の姿を覗いてみた私は、冷水を浴びせられた思ひにさせられた。といつてもそれは、何でもないことかも知れない。眩暈を防ぐためにでもあらう、白い手拭できつく頭をしばつた彼が、祭壇の前に置かれた机で何か讀みふけてゐるのである。すでに夫人の聲で、私の訪問にも氣づいてゐる筈なのに、立ちあがつてくる様子も見せない。それから不思議にも、英靈がつくまでの彼の風貌が感じられ、少しも不愉快でないばかりではなく、かへつてそれでよかつたといふ風に思へるくらゐであつた。暫くすると草加の聲がきかれた。

「こつちへきてくれんか……火もあるから……」

「お邪魔ぢやないですか」と私は遠慮した。

すると草加はいつそう静かな口振で答へた。

「いや、待たせて済まなかつた」

茶を運ぶ夫人のあとからはいり、祭壇に黙禱をささげた私は、火鉢を中にして坐りながら、机上の書物をチラと見た。それは薄い冊子であつたが、見出しの「金属材料の磁氣及電氣的検査方法」といふ文字だけは見遁さなかつた。何故ならそれが、軌道探傷器の機能原理であるのを、私も知つてゐたからである。

草加は夫人が出て行くと、鉢巻をしめなほしながら笑つた。

「風邪でもないのに頭痛がするんだよ、かうしてるといいもんだから、失敬する……」

「お休みになつてゐたら如何ですか」

「いや、起きてた方がいい、やはりかうして本を讀んでゐると、いつの間にか忘れてし

まふんだよ」

さういつて彼はもういちど笑ひ、それは何かと私が持参した書類を指し、見ようといふのである。そこでそつくり渡してしまひ、ひろげる度に説明してゐた私の視線は、やはり室内に向けられ勝であつた。然しそこにはすでに、會ての研究室らしい何物もなく、ただ祭壇のみが大きく存在してゐるだけであつた。どこへ片づけられたのであらう。そのままになつてゐると夫人がいつた部分品も、相當大きなものと想像されるやりかけの仕事も、多くの器具も何もない。祭壇以外にあるものといつたら、やはり初めから映じてゐる小さな机と、その上の書物だけである。さうした部屋で、獨り肅然と端座してゐたさまが、再び私には思ひ浮べられ、一時失つたのぞみを取戻せたやうに考へられてくるのであつた。

「これは今月出来さうもないから、事務所の機關車係とも連絡して、機關區へいつてやつてくれ給へ」と彼は他の機關區からの六ヶ月検査の依頼狀を差出した。

「來月はどうでせう？」と私はたづねた。

「たいてい大丈夫だらうと思ふが、ハツキリしたところはわからんね」

「その程度の返事でよろしいですか？」

「仕方がない」と呟きながら更に別の書類をひろげて暫く見入つてゐたが、

「入場機關車の變更ぢやないか、突然こんなことをされては困る、さう大宮工場へいつてやり給へ、大至急に……」

「どの機關車です？」

「こないだ轉屬になつたやつさ、向ふのいふ通りになつてゐたら、運轉出來ない列車が出來てしまふよ」

「然し、期限がきれてゐるとしたら、そのまま使へないわけですから、どつちしても同じぢやありませんか」

「代りを寄越して貰はう、それでいいだらう」

「え」

それからまなほ、叮嚀に讀んではいぢいち捺印し、適當な指示を私にあたへるのだが、何れもゆきとどいた理解の上でなされてゐるのがよくわかつた。それはその日の彼の頭が特によいといふのではなく、仕事への誠實さからくる感じであつた。

書類の處理が終り、所在ない瞬間が訪れたが、ついに私には探傷器の問題を持出すことが出來なかつた。考へて見れば、今更あきらめたのかとたづねる必要もなく、つづけてくれなどといへたものでもない。その日の彼を知るまでの私の杞憂に過ぎなかつたのが、次第にわかつてきたのである。

やがて私が立ちあがらうとすると彼は思ひ出したやうにいつた。

「實はね、昨日、高橋さんがきてくれたんだよ」

「高橋さんといふと？」と私は何氣なくきき返した。「高橋中尉さんさ……きてくれたのはありがたいが、例の機械はどうなつたかといふわけで、ひどい目にあはされた」



「さうですか、さうでせうね、あのときは、すいぶんはつきりおつしやつてをりましたからね」

「君にもさうきかれたかね」

それには私もあきれた。

「明日にでも持つてくる、といはんばかりでしたよ」

「さうだつたかな、出来あがり次第に持つて行くつもりではゐたが……」

「いつごろになるでせうね？」と私はたづねた。

彼は案外素直に答へた。

「豫定が豫定にならないので何ともいへん、さうあわてなくもいだらう」

「そりやさうです」

「明日は出勤するつもりだから、みんなによろしくいつてくれ」

私につづいて立ちあがつた彼の瞳が鋭く机上の書物にそそがれたのを、私は見遁さな

かつた。

何處へ行つたのか、夫人の姿は茶の間にもなく、私は玄關へ出た。

## 第九章

氣にかけてゐた市葬が、思ひがけなく數日後に行はれることになり、その間草加夫婦はもちろん、私もあわただしく過したが、無事にそれも済ますと、再び静かな生活がもどつてきた。市長を初め、いろいろの團體長の列席の前で、嚴肅になされた當日の感激を、草加は終生忘れることが出来ないといつてゐたが、多くのひとの視線を浴びながら、焼香に出て行つたときの宙に浮いたやうな足どりや、夫人の頭ばかり下げてゐた所作を思ひ浮べるだけでも、それが全く言葉だけでないのがわかる。一見、そこには過去の生活も何もかもないかのやうでありながら、將來への決意を腹深くしまひこんでゐるのがときとしてひらめくやうにわかり、つよく私の共感を呼んだのである。國のためと

はいへ、ひとり息子を戦場に失つたといふこと、その息子の靈を弔ふために、多くのひととびとがあつまつたといふこと、そのやうな當然だといつてもよいことのなかに、新しい生活を見出しつつあるのだと思ふと、同じ感は深まるばかりであつた。日日の作業計畫への指示と、實際の仕事の指導と、自らの綿密な検査と、それ等を次次にやつてのけるさまにも、曾てないほどの積極性が見られるやうになり、やはり口にはださなかつたけれど、軌道探傷器への熱情と、何日間かの研究がものになりつつあることへの確信とが、だんだん色濃く顔色に見られるやうになつてきた。それはそれまでのやうに、仕事に順調にすすんでゐるときにだけよい機嫌になつたり、或はまた別人のやうなお喋りになつたりするといふやうなものではなく、不思議に不安の伴はない點に、私は新たな關心を持つことが出来た。といふよりは、本當に今度こそ大丈夫にちがひないと信じられるやうになつてきたのである。或休養日の翌日のことであつたが、私より少しく遅く出勤した彼が、煙草に火をつけながら私のテーブルに寄り、若干はてれくさげな微笑まで

浮べ、實は昨日丸山さんのところへ行つてきたよ、といった。それには私も、いちど私  
が訪ねることをすすめたとき、あのひとにわかつてゐることは、こつちでもわかつてゐ  
るのだから無駄だといはれてゐただけに、さすがに意外な感をいだかないではゐられな  
かつた。

然し彼は、次には自らのこだはりを、意識的に拂ひのけるやうな口振でいつた。

「あれで家へ行つてみると、事務所で會つたときとはちがつて、なかなかいいひとだ  
よ、本當に……」

「何か得るところでもありましたか？」と私は、自然に冷やかになる、自分自身に氣づ  
きながらたづねた。

「大ありだつたよ、こんなことなら、君にすすめられたとき、すぐにでも訪ねればよか  
つたと思つたくらゐだ」と例の童顔をつくつて笑つた。

「私たちの知らないことでも話に出たんですか？」

「いや、さうでもない、みなわかつてゐることなんだが、きいてゐて自信がついてきた  
やうに思へるんだね」

「それではいよいよ丸山さんも、あんたが計畫されてるやうな探傷器を認めたわけです  
ね、つまりその完成の可能性を……」

「そりやわからん、そこまでこつちもきく必要はないと思つてゐたし、ただ何だよ、軌  
道の磁化の問題だね」

「簡単に出来るといふんですか」

「簡単といふわけにはいかんが、出来ないことはない、その方法などもうなづけるもの  
があつた」

「きかせて貰へませんか」

「それよりも何だよ、君、人間といふものは決してひとりぢや歩けないもんだ、といふ  
ことがつくづくわかつたよ」と彼は不意に感慨深げな調子でいつた。

それには私もまごつき、暫くはかへす言葉もなかつた。そして、たとへばどのやうな厚遇を受けたにしろ、たつたいちどひとを訪ねただけで、そのやうなことをいひだしたのだと思ふとよけいわからなくなり、自然に微笑ましくなつてくるのであつた。

「結局何ですね、丸山さんから得たものは技術でなくて、もつといいものになるといふわけですね」と私はからかふやうな調子でいつた。

すると彼も聲をたてて笑ひだした。

「この頃は自分でも少し變つたのがわかるよ、ずいぶん可笑しいだらうね」

「そんなことはありませんが」

「さうかね、ありがたいんだかありがたくないんだか……」

「いいと思ひます、どつちしても草加さんは草加さんですし、いまのお氣持でやられた方が、かへつて仕事が早いんぢやないかといふやうな氣もしますよ」

「わからんね」

さういふ彼の口もとに、やはり自信ありげな微笑が泳いでゐたのを、私は見通すことが出来なかつた。同時に私は、甚だ不遜ないひかたかも知れないが、さうしたところに彼の人間としての成長があるやうにも思はれ、本當に心すべきことだとも考へた。或觀點からすれば、彼のもつとも大きな特徴だともいへる性格のはげしさが、だんだん失はれて行くのではないかといふ不安もある。だいちあれほど嫌つてゐた丸山技師を訪ねたといふことからしてさうだが、それがひとり息子の戦死とその後の多くのひとびとの好意とに、むくゆる氣持からきてゐるのを思へば、探傷器考案の動機も同じところにあるのだから、またやむを得ないことだといふ風にも思ひなほされてくる。そしていまはただゆとりのいつそう大きくなることを希み、一日も早く仕事にかかつてくれることをねがふほかはない、と私は自分自身にいひきかせた。

然し彼が、實際に仕事にかかるまでには、それから相當の日數を要した。きまりきつた日常業務に餘念なく、再び私をいらさせただが、思ひがけないひとつの事件の

發生が、やうやく彼を起させたかのやうであつた。それは機關士の藤井達郎が、停年で事務所から辭職を勸告されたことで、事件などいささか大げさ過ぎる感がないでもないが、草加の立場からすれば容易ならぬ問題にはちがひない。

私は初め、それを乗務員詰所で若い機關士にきき、例の大山みつ子の問題も未解決のままになつてゐるところから、必要以上にあわてて修繕線に引返し、ひとり機械部分の點檢に夢中になつてゐた草加に傳へたものである。すると草加は意外にも向きなほりさま、そんな馬鹿な話はないだらう、と驚くほど大きな聲で突つかかつてきた。

それにも私はあわてたが、すでに一機關士の言だともいへなくなつてゐた。

「とにかく、みんながさういつてるんですから、間違ひありません、こんなデマを飛ばすやつはないでせうからね」と私はいつた。

「うーむ」と彼は私を睨んだまま唸つた。「もう辭令が出たといふの？」

「そこまではきいてゐませんが……」

「やつぱり出鱈目だらう、俺がきいてみてやらう」

さうして修繕線を出て行つた彼は、私が事務室に歸つてゐると間もなく戻つてきた。それが先刻の彼でないのはひと目で私にもわかつた。

「奴さんは、この頃、ひどく眼がわるくなつたらしいよ、信號も満足に見えないんださうだから、まあやむを得ないね」といふのである。

あの栗鼠のやうな眼で、と思はず私もいひかけたが、

「それでも何ですね、知つてるひとにやめられるのは、さびしいですね、藤井機關士がああいふひとだと思ふとよけいです」

「ああいふひとといふと？」

「つまりその例へば大山の問題で苦勞を共にしたひとといふやうな……」と私は笑つた。

彼もまた苦しげな微笑を洩した。

「が、奴さんには心配がないからいい、金も相當握つてゐるし、子供も大きくなつてゐる、それに共済組合の年金もついてゐる筈だから、それでいいぢやないか」

「それはまあさうですが、かうした時代でもあるし、まだ働けるんぢやないでせうか？」

「いや危いね、鐵道のためにも奴さんのためにもやめた方がいい」

「さうですかね」

「だつて君、さうぢやないか」と彼は變に熱情的な口吻になつてゐた。「機關士といふ事は容易ならぬ仕事だよ、雨風にかまはず出て行かなければならない、そしていちど停車場を出たら最後、ひとの生命も財産もみんなあづけられてしまふのだ、さういふことを主にして考へても、奴さんの場合は當然ぢやないか、といつても何だよ、技工長ならいくつになつてもつとまるといふわけぢやない」

「そんなことはわかつてゐます」と私は口ごもりながらいつた。

然し彼は事務室の中を歩きながら、いつそ反省的な口振になり、といふよりは自分

自身にいひきかせるやうにつづけた。

「奴さんだつてちゃんと考へてゐるだらう、大丈夫だよ、山邊君だつてあの通りやつてるし、本人はかへつてやめてよかつたと思つてゐるかも知れない、何といつても年齢が年齢だからなあ……」

「藤井さんは、あれで鐵道へはいつて、どのくらゐになつてゐるんでせうか？」

「さあ……日鐵（日本鐵道株式會社）時代だからだね、俺よりは少し長いかも知れな

い

「年齢も草加さんよりは上でせう」

「さう見えるかい？」と窓ぎはに立ちどまつた瞳が、靜かに私にそそがれた。

私はわざとらしいと思ひながらも、笑はないではゐられなかつた。

「正直のところ、五つや六つちがふやうですね、その點は不思議なもんだと思つてゐますよ」

「不思議な？」

「ええ、普通は考へごとばかりしてると、誰でも老けてしまふんですが、草加さんだけはさうちやありませんからね……」

「なかなかうまいことをいふ」

「うまいことちやありません、本當なんですよ」

それには草加もかへす言葉がなかつたらしく、再びゆるやかな足どりで往つたり來たりし始めたが、ふと私は初めて彼から大山みつ子の話をきかされた夜の、かたいカツレツにかじりついた瞬間の彼の顔を思ひだし、やはり彼にはいくら年齢をとつても變らぬものがあるのだと思ひ、かさねて微笑ましくなつてくるのであつた。然しまたすぐに、いつまで経つても黙々と歩みつづけてゐるさまからは、口ではあれほど藤井機關士の辭職を肯定しながらも、それをただちに自分自身の問題として考へないではゐられない事實が、いたいたしいほどに見てとれた。それは同年輩者の誰もが共通的に味つてゐるこ

とであるにはちがひないにしろ、近くにはひとり息子を失つたといふこともあり、何十年かかかつて得た金も新しい考案のために大半失つてゐるのだし、それにその考案もいつ完成されるのやらわからないといふ點から考へても、ちよつと慰めやうもない氣持であつた。然しまた半面には、さうした彼の過去の業績と、現在やりつつある仕事の重要性とからすれば、それが單なる私などの杞憂に過ぎなく、藤井機關士の場合と同じに見る必要などないやうにも思はれる。それは機關士と技工長との職責の相違、業務の特殊性などからいふことが出来るであらう。ひとりの藤井機關士を失つた事實は、あくまで藤井機關士を失つたといふことであつて、草加とは何の關係もないことだ、といひたくもなつてくるのであつた。

その日私は彼と肩を並べて歸途につきながら、何れかといへばもの思ひにふけり勝ちの彼を、何とかして慰めたいと思つたのだが、何をいつても反對の結果を招いてしまひさうな不安がさきに立ち、かへつて私の方がいらいらしたくらゐだつたが、やがて

別れなければならない地點まで来たとき彼は立ちどまつていつた。

「やはり俺が考へちがひしてゐた、君にもいろいろ心配かけてしまつたやうだが、要するにそんなことはどうでもいいことぢやないかね」

「……？」 わかつたやうでわからないまま私は草加の顔を見まもつた。

それを草加は、避けるやうに視線を伏せ、ひとり合點にうなづいてゐた。

「初めは俺も、藤井と俺とはちがふ、さう思つてゐた、ところがちがつてゐやしない、同じなんだ、それでいいぢやないか」

「いや然し……」

「いや、然しぢやない、さうなんだよ、藤井のところには當然くるものがきたのだ、そしてそれは誰のところにもいつかくるものなのだ、それが現實でもあり自然でもあるわけなのだ、いくら考へたつて、心配したつて、どうしようと思つたつて、仕方のないことだらう？」

「そりやまあさうですが……」

やむなく呟いた私の言葉尻に、からみつくやうな調子で彼はつづけた。

「つまりその何だね、それとこれとは別物なんだよ、藤井が機關士でしかないやうに、俺はやはり技工長でしかないわけさ、朝出勤して達示を見るだらう、修繕線へ出て行くだらう、六ヶ月検査をやるだらう、試運転もやるだらう、さういふことをいちばん大切にしなければならぬ技工長なんだな、技工長を軽んずる意味からでなく、いまごろになつてそれが俺にもわかつてきたんだ、おそらく君にだつてわかつて貰へるだらう」

「そりやよくわかりますけど、私はそれだけぢやないと思ふんです、それだけぢやありませんよ」

「むろん、それだけぢやないが、しつかり考へつめると、さういふことになつてくる、俺が勝手にやらうとしてゐる仕事と、機關車の檢修と、それが全然別だといふんぢやない、けれど、それとこれとはやつぱりちがつてゐるんだよ、さうだよ、それでいいんだ



よし。

そしてひとり合點に何度でもうなづくのである。それからもう、不思議に不安が感じられなかつたためであらう、といふよりは、初めて達すべきところに達したときの満足と、そこから新しい道がひらけさうなときの喜びとが、私の胸のうちにも湧きあがってくるやうであつた。

草加が、再び探傷器のみの生活にはいつたのは、それから間もない。

毎朝の出勤が私より二時間も早くなり、居残つていつごろ帰宅するのかわからなくなつたのは、曾ての場合とちがはなかつたが、全く性格が變つてしまつたかのやうに、いつも機嫌がよいのには誰もが意外の感をいだいた。例の車庫の隅の暗がりに、猫のやうに脊を丸めて蹲み込んでゐるときでも、急を要する仕事への指示が欲しいといつて行け

ば、ときには靜かに立ちあがり、ときには笑顔をづくりながらもとめに應じてくれる、といつたやうな具合である。修繕線の仕事が、はからざる事故のために思ふやうにすまなくとも、へまをやる技工を前にしても、決して大聲で叱りつけるやうなことはなくなつた。必要があれば軽くたしなめるとか、自ら器具を手にしてやつてみせるとか、子供にもわかるやうに平易に説明してやるとか、そして時間を惜しんでゐるやうでもないさまには、急に目立つてきた白髪からでもあつたにちがひなからうが、何か神神しいものさへ感じられた。それは單に私ひとりばかりでなく、多くの技工たちの間でも同じやうにみとめられ、すつと何れかといへば親分的なよさへの尊敬だつたものが、もつと心の中へまで溶けこんでゆく、つよく清らかなものに變つてきたのも事實である。技工長のためなら、何をおいても働かなければならない、といふ氣持も、いつしかさうするところが義務だ、といはんばかりになつてゐた。

然し佛様みたいになつたといふのではない。どんなことがあつても感情を面に現さな

いといふのではなく、ただひとつ探傷器のことを持ちだしたときに示す不機嫌振も、また格別であつた。もつともこれまで、秘密主義をとつてきたのも事實だがそれはあくまで質問を避けるといつた程度であつた。それがそのころは、うっかり少しは進捗しましたか、とでもたづねたらいへんで、そんなことをきいて何の役にたつのだ、と呶鳴られてしまふ。私も何度か同じやうに叱られたが、初めのうちはやはり思ふやうにすすんでゐないからだときめてゐたけれど、やがてさうでないらしいのがわかつてきた。それは単に自分が計畫しつつある仕事を、完成するまでひとに知られたくない、といふやうなそれまでの態度とは異り、たしかに彼自身の置かれてある現實への理解が、別の彼をつくりだしつつあるといつた感じで、そこにはもう私などのおせつかいをゆるさないきびしさが感じられた。不思議なたのもしさも感じられた。それが次第に今度こそ大丈夫だといふ期待に變つてきたのも事實である。

それでゐてまた半面に、私は時折藤井機關士が退職したことが動機になつてゐる事實

を思ひだしては、ひよつとしたら焦つてゐるのではなからうかと思つたりした。それは初めのころ、彼が英靈の到着を目標にしてゐたことが回顧されるからでもあつたが、彼がやがて自分自身も藤井機關士と同じ事情のもとに置かれるにちがひない、といふその日を目標にしてゐるかも知れない。實際にさういふところも見えるのである。ときとして彼は、生活を保障されて働けることの喜びを説き、結局人間といふものは、このやうに働いてゐるときがいちばん幸福ではなからうかといつたり、やめてしまつたら何もかもおしまひだからな、とひとり言のやうに呟いたりするのであつた。それまでの彼の數の器具の考案が、日常業務の必要から企圖されたといふ點から考へても、どんなに彼のために職場のあることがよかつたかがわかる。それは軌道探傷器の場合も同じで、そのために一日の大半の時間を割かなければならないにしろ、若しさうした環境に置かれてゐなかつたら、かへつて完成など不可能だといつても差支へないからである。彼がまたそのことをきびしく感じ、ひとつの不安として胸にいだいてゐることは、決して彼

の弱點だとばかりいひきれないものがあらう。さう思ふと私は、容易にそのやうなことはあるまいと思ひながらも、萬一の場合も豫想され、ひとごとではなくなつてくる。そしてそこに新たに私がやらなければならない、ひとつの仕事が出来てきたやうにも思へてくるのであつた。

毎日のやうに居残りがつづき、夕方になるとよく夫人が辨當を運んできたが、當の草加が試運轉に出て歸らないでゐたことがあり、特に用事があるといふので事務室に案内したことがあつた。そのときの夫人も、いつもに變らぬ服装こそしてゐたけれど、草加と同じやうに前の夫人とはちがひ、どこかおだやかなゆとりが感じられた。名もないひとりの發明家のために、自分の生活を犠牲にしてゐるといつたやうな、あの痛痛しいところなど少しもないのが私にも嬉しかつた。

草加の椅子を、ストーブのかたはらに引寄せてすすめた私は、何氣なくたづねてみた。

「お宅でも仕事をやつてをられるでせうね？」

「はあ」と夫人はちよつと表情をくもらせたが、すぐに靜かに顔を振つた。「それでも何でございます、あのやうになつて十郎が歸つてくれたせゐでもございませう、たいへん人間が變りました本當に口やかましい點がなくなりました」

「それは職場でも同じですよ、奥さん、あの研究室はまた以前と同じやうになりましたか？」と私は若干、立ちいり過ぎる感をいだかないでもなかつたが、例の襖の鍵を思ひだしたままたづねた。

夫人ははにかむやうに笑ひながらうなづいた。

「それでもこの頃は、草加がゐないときだけは私にもはいれるやうにしてくれてありますの……」

「仕事はよほどすすんでゐるやうですか？」

「わかりません、さういふ點では相變らずでございます」

「特に氣にかけて居られるやうなことはございますまいか？」

「と申しますと？」

「つまりその、たとへば藤井機關士のことなどについて……」

「さあ——」と夫人は首をかしげてから、「藤井さんに何かあつたんでございますか？」とききかへしてきた。

それには私も驚いたが、すぐにまた、あまり職場のことなど夫人に話さぬ草加だつたのに氣づき、さりげなく藤井機關士の退職の問題を傳へた。すると夫人も、初めは何でもないひとごととしてきいてゐたやうだつたが、さうした事實を殊更話す私の意を誤解したのであらうか、伏眼勝ちによこす視線の震へには不安のおのきが感じられてきた。同時に私は私で、そのやうなことまで夫人に黙つてゐた草加の本心が、それだけにつよくためられてゐるのではなからうか、といふことに氣がついた。若しさうでなかつたなら、そのやうなことくらゐ話すのが當り前だといふ風に考へられてきたのである。

る。

夫人は私の話が終るのを待つてゐたといはぬばかりにいつた。

「それについては、思ひあたる點がないでもございません、つい先日こんなことを申してをりました。田舎へでも引つ込んで、のんびりとお百姓でもやつて暮したいもんだ、といつになくしみじみといふもんですから、私も珍しいことがあるものだと思つて笑つたんでございますけど……」

「本當に草加さんらしくありませんね」と私も笑つた。

「それでもやつぱり、誰でも年をとりますと田舎へ歸りたくなるもんでございませう」

「その田舎といふのはどちらなんですか？」

「田舎と申しましても、草加にはない筈ですから、どこを空想してをるのかわかりません……ひよつとすると、静岡あたりを考へてゐるかも知れませんが」

「奥さんのご親戚のいらつしやるところですね」

「ええ……けれどもそれも、探傷器が出来あがらなかつたら駄目だといつてをりましたから、その點は私も安心してをりますか……」

「さうですか、それで私もホツとしました、ここで投げだされたんでは、こつちがかなひませんからね」

チラとよこした瞳が、美しい輝きに満ちてゐたのを私は見通さなかつたが、さうした點にも私はその後の草加夫婦の生活が、どんなにも静かなものであるか、想像するところが出来た。それが英靈歸還といふことから發してゐるのは明らかであり、更に藤井機關士の退職が、決定的のものにしたともいへるであらう。それはかへつてひとつの喜びにちがひない、とも思へてくるのであつた。そこで私はあらためて、藤井機關士の退職は、あくまで藤井機關士一個の問題であるといふこと、草加自身が私にいつてゐたやうに、機關士と技工長の職能の相違から考へても、心配する必要はないといふこと、各種の機械を考案してきてゐる事實は、新しい企畫が仕事にうつされてゐるといふことで、

停年の問題など問題であり得ないだらうといふことなどを、夫人に話したものであつた。すると夫人も素直にうなづき、さうあつてくれればこの上ないと、哀願的な微笑をさへ浮べるのであつた。

藤井機關士の家を私が訪ねたのはその數日後である。それはひとつには、例の大山みつ子の家が、その後どうなつたかききたかつたためでもあるが、退職するまでの事情を明らかにすることで、草加のためになりさうなものがききたらききたかつたからでもある。すでに制服も、制帽も、外套も何もない、白白い感じのする部屋に、氣味のわるいほど愛想のよい物腰で私を案内した彼は然し、思ひがけないことを私に知らせてくれた。もはや大山みつ子の家は、山邊の斡旋でなにとかに賣却されたといふこと、それが解決したからといふわけではないが、藤井自身は近く大陸へ渡るつもりでゐるといふことであつた。

「それで何ですか、家は山邊さんの獨斷で賣つてしまつたんですか」と私は責めるやう

にたづねた。

藤井達郎はどもりながら答へた。

「いちどだけは相談にあづかりましたがな、だいたいまあ山邊君にきめて貰つたやうなものだが、あんたの方には何の話もなかつたのですかな」

「ありません」

「そりやをかしい、忘れてしまつたわけでもあるまいが……」

「いつたい、どれほどの価格で賣れたんでせう？」

「三千圓でしたよ、三千圓ではどうにもならないと思つたが、いつまた買手があるかわからんから、その邊でどうかといふことになつたもんでね」と明らかに相手は、言譯でもするやうな口振であつた。

けれども私は更に、

「そしてもう金はわけてしまつたんですね？」

「いや、わけたといふよりは、山邊君の手であてがひぶちにされたやうなもんで……本當に馬鹿をみちやいました」

「どれくらゐになりました？」

「さうだね」と藤井は考へ込むやうに顔をかしげたが、「三分の一より少し多いくらゐでしたか」

「だした金ですか？」

「うん、考へると癪に觸つてならんが……どうにもならん、俺ももうひとに金を貸すことだけはこりこりした、十年がかりで蓄めたのをいちどきに飛ばしてしまつたんですからなあ」

さういふ口吻から、彼が決して嘘をいつてゐるのでないのがわかつてくるにつれ、私はかへつてそれくらゐでよくあきらめられたものだといふ風に思へてきた。大陸へ渡る計畫があるのを、自分自身にいひきかせるやうに喋つたのはそれからだが、或はそのこ

とが大きく役立つてゐるのかも知れない。職場の中で、大陸での経済生活が夢でも見るやうに話されてをるのを考へると、いつそうさうとしか思へなくなつてくるのであつた、總べての相談から除外された事實から、山邊への不満を感じながらも、出金を抵當に三百圓借りてあるのを思ふと、よけい腹立たしくなつてもきた。それをやうやくの思ひで抑へた私は、相手の辭職の理由をたづねた。事務所から勸告されてその氣になつたのか、それとも大陸へ渡る決意がさうさせたのか、後者であつてくれればよいとねがひながら……。

藤井達郎はあつさりと答へた。

「正直にいふと、何れともつかないのさ、辭職の勸告を受けたのも本當だが、それは一年も前のことで、あらかじめ準備して置くやうにといふわけだつたんだよ、なかなかありがたいもんぢやないか」

「その間に大陸行の計畫をたててをられたんですね」

「さう——」

「突然くるなんてことばないですか……すぐ辭職願をだせなぞと……」

「まあ、ないだらうね、あつたら困るぢやないか」

そんなことはわかりきつたことだと思ひながらも、何か私はホツとしたやうな氣持になり、藤井の家を出ることが出來た。他にどのやうな例があらうと、草加が退職せねばならなくなるやうなことなどあり得ない、と夫人に斷言した私ではあつたが、それに別に根柢があるわけでもなかつたから、内心はびくびくものでゐたのである。だから例へば停年の整理を受けなければならぬにしても、藤井の場合に同じなら一ケ年の餘裕がある筈だし、その間には軌道探傷器も完成するにちがひない、と私には信じられてくるのであつた。

翌朝、私が出動したときにはすでに、草加は事務室のテーブルの上で探傷器の模型をいぢつてゐたが、私の顔をみると急に笑顔をつくり、別にしまひ込む様子もなく、だいぶ早いではないかといひながらストーブの方へ立つた。私は一時、模型の上に視線をとめたが、わからないままに同じストーブに兩掌をかざして挨拶した。彼はわざとらしいよい機嫌で、いくら自分が早く出勤しても、それに君が倣ふ必要はないのだといひ、夕方仕事も済んだら、どんどん歸つて貰つていいのだともいつた。

そこで私も、つひいい氣になつて話題を轉じ、藤井達郎にきいた退職の事情をうちあけてから、

「ひとの噂なんてわからんもんですね」といつた。

すると意外にも彼は俄かに顔色を變へ、

「それが君の親切といふものかね、俺にはちつともありがたくない、あまりあまく見て貰ひたくないもんだ」といふのである。

「……？」私がかへす言葉もなく相手の顔を見まもつた。

いちどテーブルへ戻つた彼は、性急に模型を作業衣のポケットへ突つこんでから、再びストーブのところへ出てきた。

「藤井機關士が一ヶ年前にいはれたからつて、あとのものも同じだといふわけにもいけません、そんな風に考へてゐたら飛んでもないことになる」

「然し……」

「然しぢやない、藤井の場合は藤井、俺の場合は俺でいいだらう、別に關係あるわけでもあるまい」

「さういふ意味でいつてるんではありません、時代が時代でもあるし、少しぐらゐ眼がわるくたつて、まだ働けるものが退職になるなんて變ぢやありませんか、それがどんな事情かちよつとたしかめてみたまでの話なんですから、氣輕にきいて置いていただけばいいんです」



訴へるやうな私に、さすがに草加も一瞬視線を伏せたが、やがて次にはひとり呟くやうにいつた。

「俺がそんなに見えるかしら？ 見えるなら見えるでいいが、君にさう見られたのだと思ふと淋しくなつてくる……俺はそんな人間ぢやない、少くとも自分ではそんな人間ではないと思つてゐる……」

「……？」

「俺は大丈夫だよ、君、どのやうなことがあつても大丈夫だよ、決してあとへなんぞひきあしないから安心しててくれ」

「そりや安心してますが……」

「氣にかかるといふんだらう、それはありがたいけど、やつぱりありがたくない、臧首になるとかならないとか、そんな問題ではない」

それには私も思はず、

「ぢや何です？」ときかないではゐられなかつた。

彼は頬のあたりをふるはせながら昂然といつた。

「停年がきて、臧首になつたらなつたで、いいぢやないか、それが俺の仕事とどのやうな關係があるんだらう……若し臧首になつて、それで仕事が出来なくなるといふんなら別だが、そんなこともあるまい、探傷器ぐらゐ、どこでだつてやれさうなもんぢやないか」

「……」

「やれるよ、きつとやつて見せるよ、心配しなくともいいことなんだよ、そんなことまで心配されたんでは俺がたまらんだらう、ねえ君、さう思はんかい、たのむからさう思つてくれよ」

さういひながら、不意に私の肩に片掌を載せた彼の顔を見て、私はゾツとした。その數日来、再びゲツソリこけてしまつた頬、骨張つた額、高くなつた鼻などが目立つてゐ

るばかりでなく、まるで血色のない鬼氣のやうなものさへ感じられた。そこにあらためて私は、その後の彼の仕事が並並ならぬものであつたことに氣づき、藤井機關士の退職から受けた衝動が、どんなに大きかつたかといふことよりも、いつそう痛痛しい氣持に襲はれてくるのであつた。さうなるともう私にはいふべき言葉もなくなつてゐた。例の大山みつ子の家屋賣却の件なども、彼にとつてははや問題にならない出來事でしかない、といふ風にも思はれてきた。

然し意外なことには、やがて點檢用のハンマーを手にした彼が、そろそろ技工たちが出てきたらしい騒々しい修繕線へ出て行かうとし、ふと思ひだしたといはぬばかりに戻つてきていふのである。

「山邊君の話もきいたよ」

「……？」驚いて私は相手の顔を見た。

けれどもそれには變に自嘲的な微笑が浮んでゐた。

「みんなこつちがわるいんだよ、金に目のない奴ばかりだといふことに氣づかないでゐたんだからね」

「山邊さんにお會ひになつたんですか？」

「會はない、會はなくてもいい、會つても仕方があるまい」

「いや會つて貰つた方がいいと思ひますけど……」

「結果は同じぢやないか、よけいな時間をつぶすだけ勿體ない」

私は不審に思はれるままにあらためてたづねた。

「それを草加さんは誰からおききになつたんです？」

「森田だよ」

「森田？」

「うん、君が黙つてくれてゐる氣持もわかるが、まあいいぢやないか」  
ひどい山邊だといふ言葉を、瞬間に呑みこんだ私は、

「けど………」とあわてて口ごもつた。

草加はストーブの端をハンマーでいたづらにたたいていつた。

「かまはん、好きなやうにやらせて置かうぢやないか、俺はもう何もいらんのだから………」

「それでも結末だけはつけて置いた方がいいと思ひますがね」

「結末といふと？」

「つまり何ですよ、取るべき金は取り、かへすべき金はかへす、そしとかないとあとでまた面倒になると困りますから………」

「面倒になるやうなことはない、なつたらなつたでかまはんが、俺はもう金のことなど考へるだけでもいやだ」

「ぢや、やはり私にまかしといて下さい」と私はいつた。

すると相手は、暫く私に瞳を据ゑてゐたが、やがていらいらしげな舌打といつしよに

叫んだ。

「無駄なことだよ、もうよけいな時間つぶしはやらないことにしようぢやないか」

「出来るだけさうしませう」と私は事務的に答へた。

「出来るだけね………」

私の頑強さが、可笑しくなつたのであらう、草加も笑つてさう呟き、汚れた軍手をはめながら出て行つた。私も笑ひだしてしまつたが、そのときはすでに彼も、すつかりおだやかな感情を取戻したかのやうに脊をのばし、柄の端をつまみ持つてゐるハンマーをブランコのやうに振つてゐた。

「子供だな」と思はず私は呟いたが、すぐにまた、それでいいのだ、といはないではゐられなかつた。

うしろ姿が修繕線の暗がりに消えるまでの數秒の時間である。

(「第一篇」終)

今日は十二月十七日である。これを書くために机に向つてみると、鹿兒島の傷痍軍人療養所にゐる曾ての戦友のひとりから、次のやうな葉書がついた。

「ベルトウなる工場に、野に山に、今ぞ思ふ存分に戦へるの喜びはあがつた。その喜びを共に喜びとする権利が私達傷痍軍人にもある。腕が一本ない。足が一本ない。胸がやられてゐる。——が、私達はまだ其の何ものにも負けない健全な精神力を持つてゐる。今ぞ私達傷痍軍人の起つべきときは來た。必勝の旗振りかざし國民總進軍の先頭に起つべきときが來た。五尺の寢臺、これ戰場！」

一字一句、多勢のものが寄つてたかつて推敲したやうな文章でもあるが、それ故に迫

るものも切實で、自然に私の眼瞼はうるんできた。いや例へば、ひとりの意志によるものであらうとも、いちどささげた身に傷痍を受け、それを養ひながらの文章とも思へぬほど、太い筋金がいいつてゐる點、全く力づよい限りである。最後の、「五尺の寢臺、これ戰場！」といふあたり、何たるすさまじさであらう。單に、病氣と闘ふ、といふだけでも、私などには容易でないと思へるのに、さうした決意が今日の國民の意志につながつてゐる、といふよりは、たしかに「國民總進軍の先頭」に立つてゐる、と述べても過言にはならないであらう。

私などといつしよに、無事に歸還した戦友たちも、何人か再度のお召によつて出征した。そのひとりひとりからも、新しい任地での仕事振を知らせて貰つたが、いよいよ故國に殉ずるの覺悟が肉體的に身につけてきたのであらう。短い文章の底には、何物にも動じない、大らかな流れが見られる。相變らずの〇〇勤務だ、などといふ言葉にも、曾ての勤務振を知つてゐるだけに、安心出来るものが感じられる。

軍服を脱いだのは二年前だが、まだ私は三十七歳で、相当行軍力への自信もあり、射撃もろまいつもりである。傷痕を養つてゐる戦友や、再度召されてやつてゐる戦友などを思ふと、ゐたたまらない氣持になる。十二月八日の朝、ラジオのニュースをきいたとき、すぐに私は新しい大陸へ上陸する自分自身の姿を頭に描いたが、實際そのやうなことにならない、と誰がいへるであらう。文學者もまた國民のひとりである。いまはただ仕事をつづけながら、お召を待つのがよいのであるが、その早からんことを祈らないでもゐられない。

文藝春秋社の好意で、「歲月」が出版されることになつたが、これはまだ未完物である。まとめた分量は、初めに私が計畫した三分の一ぐらゐで、發端篇ともいふべきものであらう。若し、今後事情がゆるせば、つづけて書いて行かうと思つてゐる。

何を書かうとしたか、そんなことを作者が「あとがき」で述べる必要などないと思ふのでやめるが、このところ、戦記ばかり書いてきた私にすれば、小説らしい構想を持たせた初めてのものとして、なかなか愛着のつよい作品である。元來、私は小説らしい小説を書きたい方の作家だが、同時に小説らしい小説を書いてゐない作家だ、ともいへるであらう。どのやうな小説が、小説らしい小説かときかれると困るかも知れないが、とにかくこの數年來書いたものが、形の上でも不十分だつたと反省されるのである。ときとして、戦記が文學であるとかないとかいふひとの論議にたいし、そんなことは問題ではない、といふ風に反撥しないでもなかつたが、決して藝術の作品的完成の必要を忘却しての暴言ではなかつたつもりである。むしろそのことを重視するが故に、根本の問題の解決の必要を強調したに過ぎない。

「歲月」は、主觀的には小説だといひたいのだが、成功してゐるか、ゐないか、私自身にはわからない。三分の一では當然かも知れないが、これだけ書いてみて、どうやら意

圖しただけのものはだせさうに思へてきたのは事實である。第一篇の筆を擱いて、そろそろ一ヶ月近くなるが、私の網膜からはまだ草加甚平が消えてゐない。おそろくは、第三篇を書きあげるまで、消えないにちがひない。完成はいつのことか、豫想も出来ないが、とにかく私はこの愛すべき人物を愛し、愛しつづけて書いて行くことにしよう。

上田 廣

歳 月

小社出版の書籍は、製本にも完全を期してゐますが、万一落丁亂丁等のあつた場合は、直接本社に御返送下さい。完全のものとお取換へ致します。

昭和十七年二月五日印刷  
昭和十七年二月十二日發行

定價 壹圓八拾錢

著者 上田 廣

發行者 江原 謙三

印刷者 堀 修造

印刷所 大日本印刷株式會社榎町工場

配給元 日本出版配給株式會社

發行所 文藝春秋社

振替東京一七六〇三番  
電話銀座五六八一―五番

925
49

終